史跡 斎宮跡

平成24年度発掘調査概報

2014年3月

斎宮歴史博物館

第176次調査区全景（北から）

第177次調査区西部全景（東から）

序

伊勢神宮の遷宮が行われ、東京に三重テラスが開設された今年度は、歴史的・文化的にも三重県が注目された年でありました。斎宮歴史博物館でも、史跡斎宮跡東部地域において史跡公園整備事業を進めたほか、平成25年３月に奈良県立万葉文化館・島根県立古代出雲歴史博物館と３館による文化交流に関する協定を結び、更なる情報発信や研究の促進など進めています。

今回報告する発掘調査は、三重県が進めている公園整備地北側の下園東区画において行われたものです。第176・177次調査では、規則的に配置された建物を３棟確認し、下園東区画にも倉庫群が存在した可能性が高まりました。調査で得られた新たな成果は、地元明和町をはじめ、県民や斎宮跡を訪れる皆様に還元し、積極的に情報発信していきたいと考えております。

史跡斎宮跡の保存および調査研究・整備活用にあたり、貴重なご意見やご指導を頂きました文化庁、斎宮跡調査研究指導委員ほか多くの方々や発掘調査にあたり様々なご配慮・ご協力を頂きました国史跡斎宮跡協議会をはじめとした地元の皆様に厚く御礼申し上げます。

2014（平成26）年３月

斎宮歴史博物館

館　長　　池　山　マ　チ

例　言

1　本書は、斎宮歴史博物館が平成24年度に国庫補助金を受けて実施した史跡斎宮跡発掘調査（第176・177次調査）の概要をまとめたものである。

2　明和町が調査主体となって実施した、史跡現状変更等に伴う緊急発掘調査の第178次調査報告書は、別途明和町が刊行している。

3　遺構の実測にあたっては、日本測地系による国土調査法（旧国土座標）の第Ⅵ座標系を基準とし、方位は旧国土座標による座標北で示している。また、建物の軸方位については、全て北を基準として表記している。

4　遺構時期区分の指標となる土器の分類と時期認定については、「斎宮跡の土器」（『斎宮跡発掘調査報告Ⅰ』斎宮歴史博物館、2001年）による。

5　遺構表示記号は次のとおりである。

ＳＢ：掘立柱建物　ＳＤ：溝　ＳＦ：道路　ＳＫ：土坑　Pit：柱穴、ピット

6　遺物実測図は基本的に実物の４分の１で行っている。遺物写真は縮尺不同である。

7　土層および出土遺物の色調は、日本色研事業株式会社発行『新版標準土色帖』（2004年度版）に拠る。施釉陶器の色調については一部、大日本インキ化学工業株式会社発行『日本の伝統色』第５版（1989年）を用いて補っている。

8　遺物の漢字表現については、材質の差による漢字の偏に必ずしも従うことなく、「わん」は「椀」、「つき」は「杯」を用いている。ただし、参考文献などからの引用の場合にはこの限りではない。

9　本書の執筆は、泉雄二・伊藤文彦・新名強があたり、編集は調査研究課で行った。また、発掘調査および資料整理については、大川勝宏・水谷豊・杉原泰子・八木光代・水木夏美・大橋由紀が補佐した。

目　　次

Ⅰ　前言 …… 1
Ⅱ　第176次調査 …… 7
Ⅲ　第177次調査 …… 23

挿 図 目 次

第Ⅰ－１図　史跡斎宮跡位置図 …… 3
第Ⅰ－２図　平成24年度発掘調査区位置図 …… 4
第Ⅰ－３図　斎宮跡方格地割区画名称図 …… 5
第Ⅰ－４図　史跡斎宮跡における大地区表示図 …… 6
第Ⅱ－１図　第176次調査　大地区・グリッド図 …… 7
第Ⅱ－２図　第176・177次調査　調査区位置図 …… 8
第Ⅱ－３図　第176次調査　遺構平面図 …… 9
第Ⅱ－４図　第176次調査　土層断面図 …… 10
第Ⅱ－５図　第176次調査　ＳＢ10241平面図 …… 10
第Ⅱ－６図　第176次調査　遺物実測図（１）…… 15
第Ⅱ－７図　第176次調査　遺物実測図（２）…… 16
第Ⅲ－１図　第177次調査　大地区・グリッド図 …… 23
第Ⅲ－２図　第177次調査　遺構平面図 …… 24
第Ⅲ－３図　第177次調査　土層断面図 …… 25
第Ⅲ－４図　第177次調査　ＳＢ10490・10491・10492平面図 …… 26
第Ⅲ－５図　第177次調査　遺物実測図（１）…… 30
第Ⅲ－６図　第177次調査　遺物実測図（２）…… 31
第Ⅲ－７図　第177次調査　下園東区画主要建物配置図（Ⅱ－２期）…… 34

写 真 図 版 目 次

巻頭　第176次調査区全景（北から）／第177次調査区西部全景（東から）
Ⅱ－１　第176次調査遺構（１）　調査区全景（北から）／ＳＢ10241（北から）…… 19
Ⅱ－２　第176次調査遺構（２）　ＳＢ10469・10470（北から）／ＳＢ10465・10466（東から）…… 20
Ⅱ－３　第176次調査遺構（３）　ＳＢ10469・10470・10471（西から）
／ＳＢ10242・10475（西から）…… 21
Ⅱ－４　第176次調査遺物 …… 22
Ⅲ－１　第177次調査遺構（１）　調査区東部全景（西から）／調査区南部全景（西から）…… 35
Ⅲ－２　第177次調査遺構（２）　ＳＢ10490・10491・10492（東から）／ＳＢ10494（東から）…… 36
Ⅲ－３　第177次調査遺構（３）　ＳＢ10500・10511・10512（東から）
／ＳＢ10500・10511・10512・10513・10514・10515（南から）…… 37
Ⅲ－４　第177次調査遺構（４）ＳＢ10504（北から）／ＳＢ10507（西から）…… 38
Ⅲ－５　第177次調査遺構（５）ＳＢ10510（北から）／ＳＫ10502完掘状況（南から）…… 39
Ⅲ－６　第177次調査遺物 …… 40

表 目 次

第Ⅰ－１表　平成24年度　発掘調査一覧表 …… 2
第Ⅱ－１表　第176次調査　掘立柱建物一覧表 …… 13
第Ⅱ－２表　第176次調査　遺構一覧表 …… 13
第Ⅱ－３表　第176次調査　遺物観察表（１）…… 17
第Ⅱ－４表　第176次調査　遺物観察表（２）…… 18
第Ⅲ－１表　第177次調査　掘立柱建物一覧表 …… 27
第Ⅲ－２表　第177次調査　遺構一覧表 …… 27
第Ⅲ－３表　第177次調査　遺物観察表（１）…… 32
第Ⅲ－４表　第177次調査　遺物観察表（２）…… 33

Ⅰ　前　言

1　調査の経緯と概要

史跡斎宮跡は、後に斎宮歴史博物館が建設された古里地区での宅地開発計画に伴い昭和45年に発掘調査が始まり、文化庁の補助事業として昭和48年から開始した範囲確認調査を経て、昭和54年３月27日に国史跡に指定された。県は史跡指定に伴い斎宮跡調査事務所を設置して発掘調査に当たり、平成元年度からは10月に開館した斎宮歴史博物館が史跡解明のための計画調査を継続して実施している。

斎宮跡の発掘調査では、史跡西部に所在すると想定されてきた飛鳥・奈良時代の初期斎宮跡を解明することが課題であるほか、史跡東部に存在した平安時代の斎宮跡中枢部の解明も重要な課題である。

近年、地元からも史跡東部の整備を望む声が高まってきたことから、平成18年度に史跡整備の在り方検討会を開催し、柳原区画を中心とした史跡東部における整備の方向が示された。そして、平成22年３月に『史跡斎宮跡東部整備基本計画書』が策定され、平成23年度からは現地での工事に着手している。

一方、明和町でも「地域における歴史的風致の維持及び向上に関する法律」に基づき、平成23年度から「明和町歴史的風致維持向上計画」の策定に取組み、平成24年６月６日に計画の認定を受けている。「明和町歴史的風致維持向上計画」では、下園東区画周辺において来訪者の案内・交流を目的とした史跡公園整備を計画している。

発掘調査

上記の課題を受け、下園東区画および周辺地域の実態解明を行うこととなり、平成24年度は第176・177次調査として斎宮歴史博物館が主体となり853㎡の計画調査を実施したほか、第178-2次調査として明和町が調査主体、斎宮歴史博物館が担当となり490.5㎡の現状変更調査を実施した。

下園東区画では、これまで10・18・23・47次調査が行われたほか、平成22年度より斎宮歴史博物館および明和町が主体となり、当区画の実態解明のために、第166・168・173・174-8次調査を行っている。これらの成果により、下園東区画では、規則的に配置された６棟の掘立柱建物が確認されており、その性格や、斎宮寮の寮庫に推定されている西加座北区画の建物群との関係解明が課題となっている。

今回の計画調査では、建物群の確認や下園東区画の南東部および中央南部の遺構状況を把握するため、第176・177次調査を実施した。

整備

史跡東部整備事業は、柳原区画の発掘調査で確認した掘立柱建物３棟の復元や平安時代の方格地割の広がり、区画間道路の整備など、平安時代の斎宮の姿を再現するもので、平成24年度は造成・区画道路舗装等の基盤整備事業ならびに復元建物の実施設計を行った。また、斎宮跡調査研究指導委員会に加え、復元建物建築にあたり、黒田龍二神戸大学大学院教授を斎宮跡研究員として委嘱を行い、復元建物の実施設計について指導を受けた。

発掘調査現場の公開・活用

近年斎宮歴史博物館では、史跡への来訪者増加や魅力の向上を目標として、発掘調査現場の積極的な利活用を行っている。具体的には、発掘調査見学者への随時公開・説明、ホームページを通じた情報発信とともに、現地説明会や夏休み子ども体験発掘教室、学校団体等の体験発掘、大人向けの発掘体験ウィークなどを開催した。

2　調査体制

史跡斎宮跡の調査・整備に関する業務は、斎宮歴史博物館調査研究課が担当した。当報告に関わる組織は以下の体制で行った。

平成24年度

泉　雄二（副参事兼課長）
大川勝宏（主幹）
新名　強（主査）
水谷　豊（主査）

平成25年度

泉　雄二（副参事兼課長）
大川勝宏（主幹兼課長代理）

新名　強（主査）
伊藤文彦（技師）

3　斎宮跡調査研究指導委員会

斎宮跡の調査・整備について指導・助言を得るため、平成24年７月10日、平成24年12月18日の２回、委員会を開催し、第176・177次調査を含む下園東区画の性格や整備について指導を得たほか、復元建物についても斎宮跡研究員も同席して指導を受けた。指導委員・研究員の方々は下記のとおりである。（五十音順・敬称略）

〔指導委員〕
浅野　聡（三重大学准教授）
稲葉信子（筑波大学大学院教授）
金田章裕（人間文化研究機構機構長）
佐々木恵介（聖心女子大学教授）
鈴木嘉吉（元奈良国立文化財研究所長）
所　京子（岐阜聖徳学園大学名誉教授）
八賀　晋（三重大学名誉教授）
増渕　徹（京都橘大学教授）
松村恵司（奈良文化財研究所長）
渡辺　寛（皇學館大学名誉教授）
綿貫友子（大阪教育大学教授）

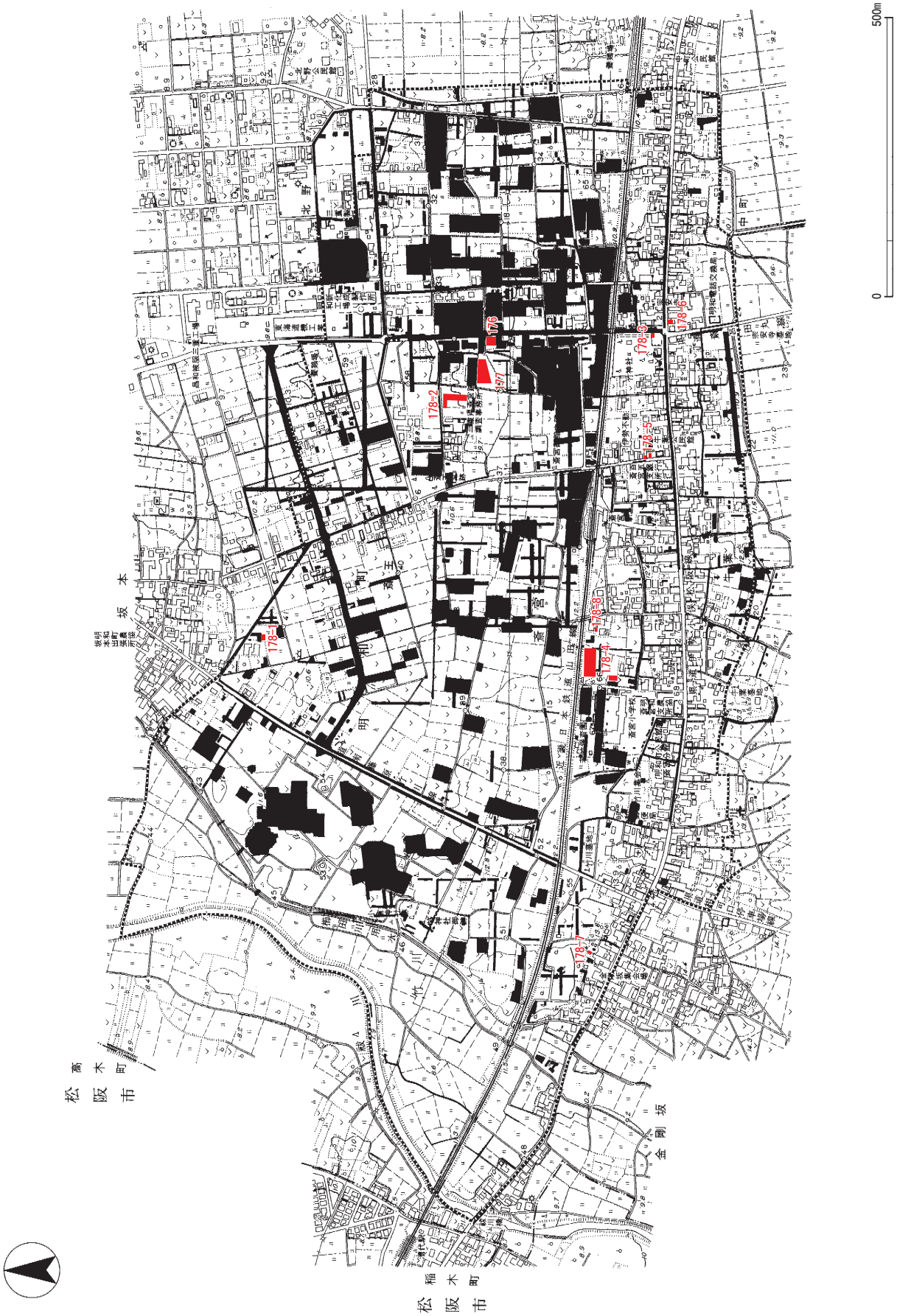
〔研究員〕
黒田龍二（神戸大学大学院教授）

（泉　雄二）

調査次数	地区	面積（㎡）	調査期間	位置	土地所有者	現状変更名	保存地区区分
176	R9	310.0	H24.5.2～H24.9.28	明和町斎宮字下園	明和町	計画発掘調査	1
177	Q9・R9	543.0	H24.10.5～H25.2.14	明和町斎宮字下園	明和町	計画発掘調査	1
178-1	M5	34.3	H24.4.24～H24.4.27	明和町斎宮字出在家	個人	住宅新築	3
178-2	Q9	490.5	H24.7.11～H25.1.18	明和町斎宮字下園	明和町	発掘調査	1
178-3	R12	3.3	H24.11.2	明和町斎宮字牛葉	神社	トイレ改修	4
178-4	L11・M11・L12	1318.0	H24.11.15～H25.3.19	明和町斎宮字広頭	明和町	学校整備	3
178-5	P12	16.3	H24.12.10～H24.12.13	明和町斎宮字牛葉	個人	住宅新築	3
178-6	S13	28.7	H25.1.23～H25.1.24	明和町斎宮字中西	個人	住宅新築	4
178-7	G11	3.0	H24.12.28	明和町斎宮字中垣内	個人	住宅新築	3
178-8	M11	5.1	H25.3.28	明和町斎宮字広頭	個人	住宅建替	4

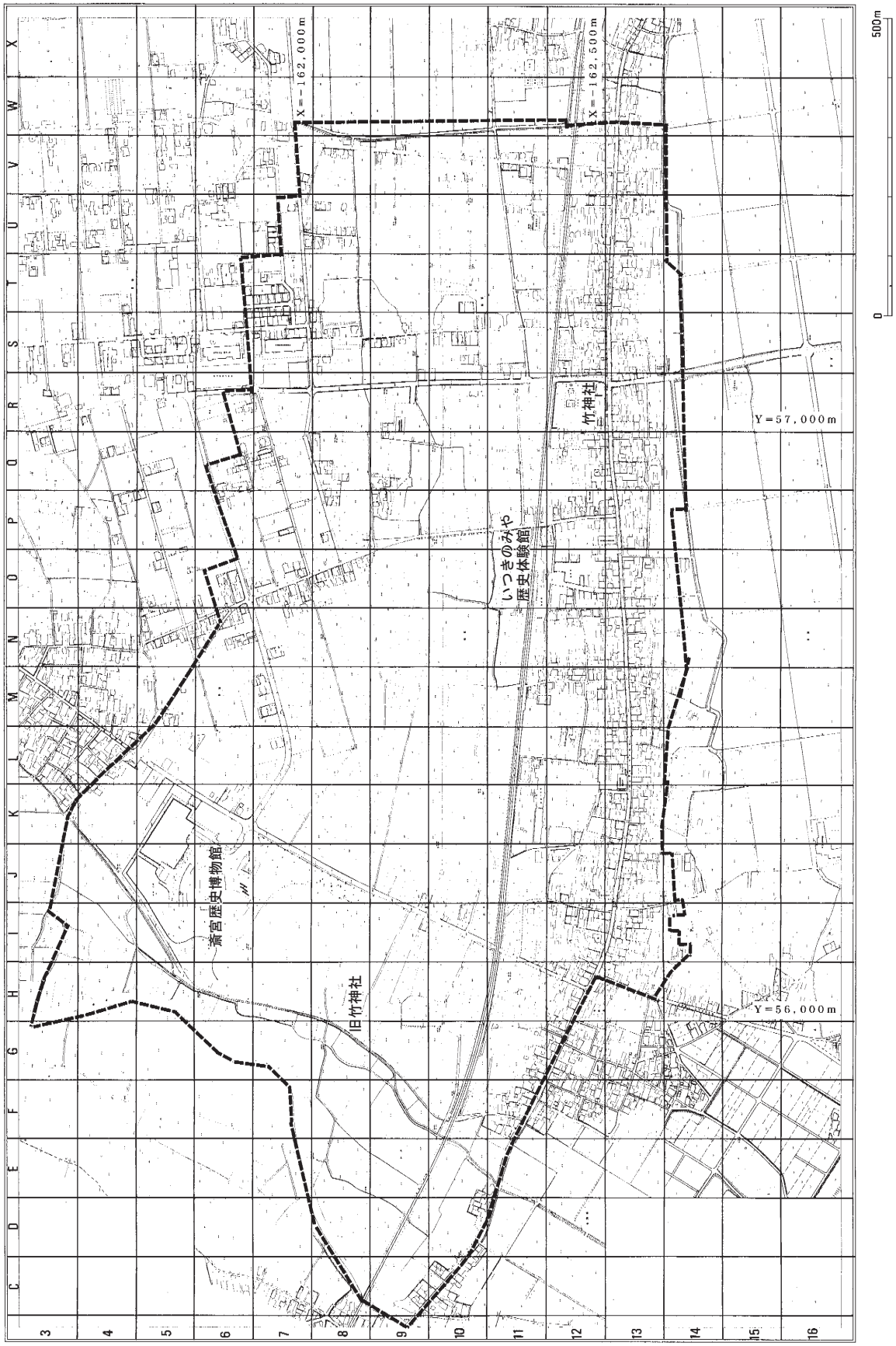
第Ⅰ－１表　平成24年度発掘調査一覧表

第Ⅰ－１図　史跡斎宮跡位置図（1:50,000）　国土地理院発行1/25,000「松阪」「明野」（平成４年）より



第Ⅰ－２図　平成24年度発掘調査区位置図（1:10,000）

第Ⅰ－３図　斎宮跡方格地割区画名称図（1:5,000）



第Ⅰ－４図　史跡斎宮跡における大地区表示図（2002年）

Ⅱ　第176次調査
（６ＡＲ９・10　下園東地区）

１　はじめに

第176次調査区は、史跡東半で確認している方格地割北辺の下園東区画東部に位置している。下園東区画では、これまで第８-10・10・18-１・18-２・23・47・166・168・173・174-８次調査を行っており、今回の調査区は、南に第168次調査区が隣接している。

下園東区画の調査では、区画東辺・南辺の道路のほか、平安時代全般にわたる掘立柱建物を確認している。区画内部では、平安時代初期から前期には桁行５間×梁間２間で東西棟の掘立柱建物が柱筋を揃えて規則的に配置されている可能性があり、特に第168次調査で検出したＳＢ10241もその１つとなる可能性が高いが、北側柱筋については確認できていない。

区画全体としても依然不明な点が多いため、第176次調査は、下園東区画東部の遺構状況を確認し、建物の変遷や空間利用の実態解明を目的として実施した。

なお、本調査では、ＳＢ10241の全体像を把握する必要があったことから、調査区を南側に隣接する第168次調査の調査区と２ｍ幅で重なるように設定している。また、調査区西側は、土取りにより、周辺の地表より約0.6ｍ掘り下げられており水田として利用された場所である。このため調査区から水田に落ちる斜面の状況を確認するため、幅１ｍで西側にトレンチを設定した。

調査は平成24年５月25日から平成24年９月28日まで実施し、調査面積は310㎡である。

２　地形と層位

調査区は標高約9.8ｍの平坦地であり、現況は畑地である。

基本層位は、表土下約0.4ｍ、標高約9.4ｍで地山面が確認できる。標高約9.6ｍでいわゆる黒ボク土が約0.1ｍ見られ、黒ボク土上面に暗灰黄色砂質土の包含層の堆積する場所も存在する。地山は地下水位の影響とみられる還元化された灰白色粘土である。遺構検出は黒ボク土層上面で試みたが、遺構の輪郭が明瞭ではなかった。慎重を期するために徐々に掘削をしたが、黒ボク土層は約0.1ｍと浅いことから、最終的に地山上面で遺構を検出した。

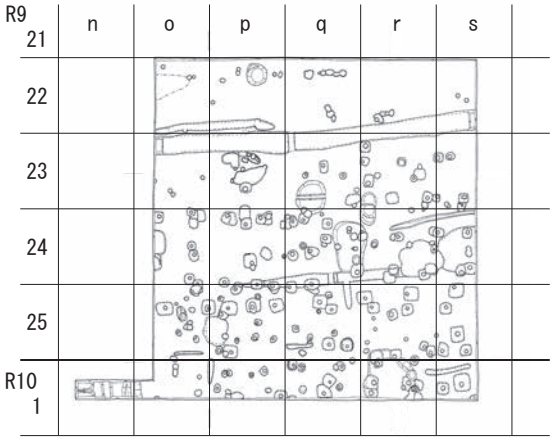
３　遺構

第176次調査では、斎宮跡の土器編年を基準とした時期区分でいう斎宮Ⅱ－１～Ⅲ期の掘立柱建物10棟、土坑11基、溝５条を確認した。掘立柱建物は調査区の南３分の２に集中し、北側では見られなかった。

（１）斎宮Ⅱ－１期の遺構

ＳＤ0525　調査区北半で確認した溝である。幅0.9～1.2ｍ、深さは0.6ｍ、断面逆台形を呈する。第10次調査で検出したＳＤ0525と連続する溝である。土師器鍋（38）のほかは遺物の出土がなく、第10次調査時にも遺物は甕の破片１点しか出土せず、時期の特定は困難だが、ＳＤ0525は方格地割の南北側溝であるＳＤ0520と連結することから、Ⅱ－１期の遺構とした。

ＳＤ10462　調査区北西側で検出した溝である。検出長6.3ｍ、幅0.5ｍを測る。溝内からは土師器杯・甕が出土しているが小片で所属時期の特定には至らない。ＳＤ0525と平行に並ぶことから、Ⅱ－１期の遺構とした。

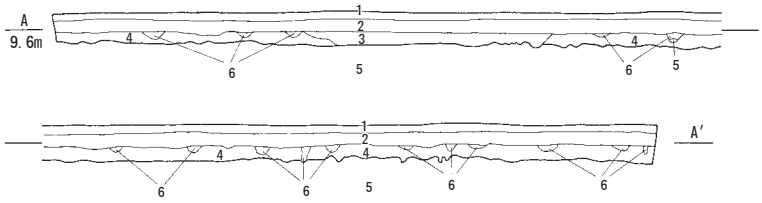


第Ⅱ－１図　第176次調査　大地区・グリッド図（1:400）

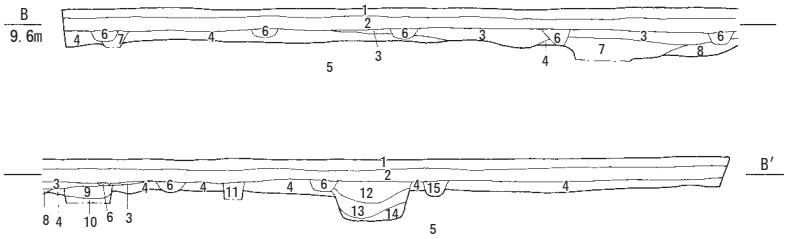
第Ⅱ－２図　第176・177次調査　調査区位置図（1:2,000）

第Ⅱ－３図　第176次調査　遺構平面図（1:200）

調査区北壁

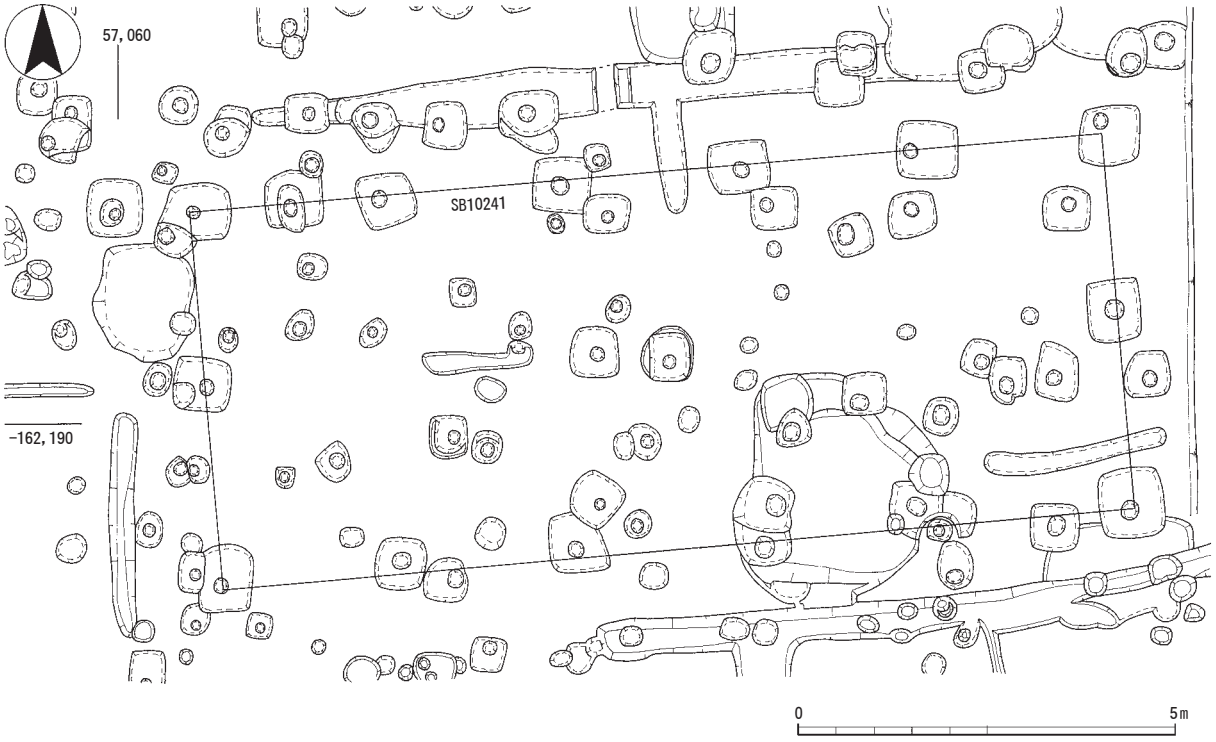


調査区西壁



1 灰黄褐色砂質土	(10YR6/2)〔表土〕	10 褐灰色砂質土に地山粘土ブロックを多く含む	(10YR6/1)〔Pit埋土〕
2 灰黄褐色砂質土に土器含む	(10YR5/2)〔耕土〕	11 黒褐色砂質土に地山粘土ブロックを少し含む	(10YR3/1)〔Pit埋土〕
3 暗灰黄色砂質土	(2.5Y5/2)〔包含層〕	12 黒色砂質シルトに土器含む	(10YR2/1)〔SD0525〕
4 黒褐色砂質土	(10YR3/2)〔黒ボク〕	13 黒色砂質シルトに地山粘土ブロックを少し含む	(10YR2/1)〔SD0525〕
5 灰白色粘土	(2.5Y7/1)〔地山〕	14 黒褐色砂質土に地山粘土ブロックを多く含む	(10YR3/1)〔SD0525下層〕
6 にぶい黄褐色砂質土	(10YR5/3)	15 褐灰色砂質土	(10YR6/1)〔SD10462〕
7 黒褐色砂質土に土器含む	(10YR3/2)〔Pit埋土〕		
8 黒褐色砂質土に地山ブロック含む	(2.5Y3/2)〔SK10468〕		
9 黒褐色砂質土に地山粘土ブロックを少し含む	(10YR3/1)〔Pit埋土〕		

第Ⅱ－４図　第176次調査　土層断面図（1:100）



第Ⅱ－５図　第176次調査　ＳＢ10241平面図（1:100）

ＳＤ10478　ＳＤ0525の南6.5mにある幅0.6m、深さ0.2mの溝で、延長８ｍにわたり検出した。調査区北側に位置するⅡ－２期の掘立柱建物ＳＢ10471より古く、東側は土坑ＳＫ10474に壊されている。出土した遺物の中には灰釉陶器が見られるものの、混入と考え、ＳＤ0525と方位を同じくすることから、当該期の遺構とした。なお、南側に位置する掘立柱建物ＳＢ10241の北側柱筋から１ｍの距離にあり、雨落ち溝の可能性も考えたが、下園東区画内で検出した他の５間×２間の東西棟建物には雨落ち溝が伴っていないことから、区画内を画する溝の可能性が高いと判断した。

（２）斎宮Ⅱ－２期の遺構

ＳＢ10241　調査区南側で検出した桁行５間×梁間２間の東西棟で、建物方向はＮ４°Ｗを測る。第168次調査で南側柱筋を確認しており、本調査において北側を確認した。柱間は、桁行梁間とも2.4mで、柱掘形は一辺約0.8～0.9mの隅丸方形を呈する。土師器甕や志摩式製塩土器の破片しか出土していないが、Ⅱ－２～３期の掘立柱建物ＳＢ10242や土坑ＳＫ10247より古いことからⅡ－２期の遺構とした。

ＳＢ10471　調査区中央東側に位置する桁行３間×梁間２間の東西棟で、棟方向はＮ２°Ｗを測る。柱掘形は一辺0.5～0.7mの隅丸方形を呈する。ＳＢ10475、ＳＫ10474・10477より新しく、ＳＫ10473より古い。柱穴埋土から土師器杯（14）が出土しており、Ⅱ－２期の遺構とした。

ＳＢ10475　調査区東南部に位置する桁行３間以上×梁間２間の東西棟である。東側の10次調査では東側の柱穴が検出されていないことから３間×２間の規模と考えられる。棟方向はＮ２°Ｗを測る。柱掘形は一辺0.5～0.7mの隅丸方形を呈する。ＳＢ10471より古く、ＳＫ10474・10477より新しい。柱穴から土師器甕（１）が出土しており、Ⅱ－２期の遺構とした。

ＳＫ10468　調査区中央西側に位置し、南北1.3m、東西は0.6m以上の隅丸方形を呈し、西側は調査区外側に延びる。深さは0.15mで、土師器杯・蓋・甕、須恵器甕などが出土しているが、小片のため図示できるものはなかった。遺物からⅡ－２期の遺構と判断した。

ＳＫ10474　調査区の中央東側に位置する土坑である。南北２ｍ、東西2.5mの不整円形を呈する。重複関係からＳＢ10475・10471・10470よりも古く、ＳＫ10477よりも新しい。遺物はコンテナで１箱に満たないが、土師器杯・甕が出土しており、Ⅱ－２期の遺構とみられる。

ＳＫ10477　調査区中央東側に位置する土坑である。南北2.4m、東西は２ｍ以上で、東側は調査区外へ続く。重複関係からＳＢ10471・10475、ＳＫ10474よりも新しい。遺物はコンテナで１箱に満たないが、土師器杯・甕が出土しており、Ⅱ－２期に属する遺構であろう。

（３）斎宮Ⅱ－２～３期の遺構

ＳＢ10242　調査区東南部に位置し、南側柱筋は第168次調査で検出した。桁行３間×梁間２間の東西棟建物で、棟方向はＮ０°Ｗを測る。柱掘形は一辺約0.6～0.7mの隅丸方形を呈する。同時期のＳＫ10247より新しく、Ⅱ－２～３期の遺構とした。

ＳＢ10460　調査区中央西端で検出した梁間２間×桁行は調査区西側に延びる３間以上の東西棟である。棟方向はＮ２°Ｗを測る。柱掘形は一辺0.6～0.8mの隅丸方形を呈する。ＳＢ10465・10466より古い。柱穴より土師器杯（２・３）・皿（４）が出土しておりⅡ－２～３期の遺構とした。

ＳＢ10469　調査区中央東側に位置し、桁行３間×梁間２間の東西棟建物で、棟方向はＮ３°Ｗを測る。柱掘形は一辺約0.5～0.6mの隅丸方形を呈する。重複関係からＳＫ10473より古い。西側棟柱はＳＫ10467と重複する位置にあるが、柱掘形がすべて土坑内に入ることはないことから、浅いために検出ができなかった可能性が高い。図示できる遺物はなかったが、Ⅱ－２～３期の遺構と考えられる。

ＳＫ10247　調査区東南部に位置し、第168次調査で土坑の大部分を確認したもので、東西2.5m、南北3.2m、深さ0.2mと規模が確定した。今回出土した遺物はコンテナで１箱に満たず、土師器杯・皿（15）・甕などが出土しており、平成22年度に報告したⅡ－２～３期の範疇におさまるものである。

ＳＫ10472　調査区中央東側に位置し、南北1.8m、東西0.8m、深さ0.2mの南北に細長い楕円形を呈する。出土した遺物はコンテナで１箱に満たないが、

土師器杯・皿・甕、須恵器甕、灰釉陶器などがある。小片のため図示できるものはないが、Ⅱ－２～３期の遺構と考えられる。

ＳＫ10473　調査区の中央付近に位置する土坑である。南北2.8m、東西1.8m、深さ0.1mの隅丸長方形を呈する。重複関係からＳＢ10470よりも古く、ＳＢ10469・10471よりも新しい。遺物はコンテナで１箱に満たないが、土師器杯・皿・甕、須恵器杯、灰釉陶器が出土している。いずれも小片で図示しえない。Ⅱ－２～３期の遺構と考えられる。

ＳＫ10480　調査区西南部に位置し、黒ボク土上面で検出した際には東西2.5m、南北２mの範囲を土坑２として遺物を取り上げたものの、重複する柱穴を検討するため、慎重に遺構検出を行った結果、最終的に南北1.6m、東西1.3m、深さ0.1mの楕円形を呈する土坑となった。なお、黒ボク上面で検出し、土坑２として取り上げた遺物については、柱穴の遺物も混入している可能性が高いことから包含層遺物として扱う。土師器杯（16）・椀（17）・皿（18）・甕・台付鉢、製塩土器などが出土している。重複関係からＳＢ10245より古く、Ⅱ－２～３期の遺構である。

（４）斎宮Ⅱ－３期の遺構

ＳＢ10465　調査区中央西側に位置する、桁行３間×梁間２間の東西棟建物で、棟方向はＮ０°Ｗを測る。柱掘形は一辺約0.5～0.8mの隅丸方形を呈する。西側棟柱以外は重複しており、２棟重複している可能性が高い。ＳＢ10460・ＳＤ10478より新しく、ＳＢ10466・ＳＫ10467より古い。柱掘形から土師器（５～７）、須恵器（９）、灰釉陶器椀（10・11）が、柱痕から土師器（８）が出土しており、Ⅱ－３期の遺構とした。

ＳＫ10463　調査区北側にある東西溝ＳＤ0525の西南側に位置する。東西0.9m、南北0.9m、深さ0.1mの不整形を呈する。出土した遺物は少ないが、土師器杯（36・37）・皿・甕などがあり、Ⅱ－３期の遺構とした。

ＳＫ10467　調査区中央に位置する南北1.8m、東西1.6m、深さ0.2mの楕円形を呈する。重複関係からＳＢ10465・10470より古い。遺物はコンテナで１箱に満たないが、土師器杯（20～27）・椀（32・33）・皿（28～31）・高杯・甕（34）、須恵器鉢（35）などが出土しており、Ⅱ－３期の遺構とした。

（５）斎宮Ⅱ－３～４期の遺構

ＳＢ10245　調査区東南部に位置し、桁行３間×梁間２間の南北棟で、棟方向はＮ３°Ｅを測る。第168次調査で南梁間筋を検出しているが、南側の柱掘形は一辺0.6mであるのに対して、北側は一辺0.4mの隅丸方形と柱掘形の規模が小さい。重複関係は、ＳＢ10241・ＳＫ10480より新しい。

ＳＢ10466　調査区中央西側に位置し、桁行３間×梁間２間の東西棟建物で、棟方向はＮ２°Ｅを測る。柱掘形は一辺約0.5mで、平面形は隅丸方形や円形が混在する。ＳＢ10465・ＳＤ10478より新しい。柱掘形から土師器鉢（12）、灰釉陶器椀（13）が出土しており、Ⅱ－３～４期の遺構とした。

ＳＢ10470　調査区中央西側に位置し、桁行３間×梁間２間の東西棟で、棟方向はＮ０°Ｗを測る。柱掘形は0.4mの円形と規模が小さい。重複関係は、ＳＢ10465やＳＫ10467・10473・10474より新しい。Ⅱ－３～４期の遺構とした。

（６）その他の遺構

ＳＤ10476　調査区東側で検出した溝である。検出長4.7m、幅0.2～0.4mを測り、東側は調査区外へ続く。溝内からは土師器杯・甕が出土している。Ⅱ期の遺構と考えられる。

ＳＤ10479　西側に拡張したトレンチで検出した南北方向の溝である。検出長は0.8m、幅は1.1mを測り、トレンチの南北へ続く。第165-１次調査で報告しているＳＤ9696同様、近世以降の字境界にかかわる遺構であろう。

４　遺物

ＳＢ10475（１）　土師器甕（1）は、球形の体部に外反する口縁部をもつ口径15.8㎝の小型の甕で、体部外面は縦方向のハケ調整、体部内面はヨコハケ後ナデ調整される。Ⅱ－２期のものとみられる。

ＳＢ10460（２～４）　土師器杯Ａは口径12.8㎝の小型（２）と15.8㎝の中型（３）の器高が深いものがある。いずれも口縁部はヨコナデされ、外上方に伸びるものである。皿Ａ（４）は、口縁部ヨコナデ、底部内外面ナデ調整する。いずれも小片であるが、

遺構名	調査時遺構名	ピット番号 ※(　)はグリッド番号	時期	規模 間(m)×間(m)	柱間寸法(m)	主軸	方位 (N基準)	備考
ＳＢ10241	建物１	(p25)P7･P8/(q25)P8/(r25)P8･9/(s25)P1･5/(p1)P6/(q1)P6/(r1)P12/(s1)P2	Ⅱ－２	5(12.0)×2(4.8)	(桁行) 2.4 (梁間) 2.4	東西	N4°W	ＳＫ10247より古 倉庫群建物
ＳＢ10242	建物２	(q25)P7.P12/(r25)P1.P2/(s25)P2.P6/(q1)P3/(r1)P8.P11/(s1)P5	Ⅱ－２～３	3(6.0)×2(4.2)	(桁行) 2.0 (梁間) 2.1	東西	N0°W	ＳＫ10247より新
ＳＢ10245	建物10	(p1)P1.P5.P9/(q1)P7.P8/(q2)P4/(p25)P1.P6/(q25)P1	Ⅱ－３～４	3(5.9)×2(4.0)	(桁行) 2.0 (梁間) 2.0	南北	N3°E	ＳＢ10241より新 第168次調査で南半調査 (内容修正)
ＳＢ10460	建物４	(o24)P4/(p24)P2.P4/(o25)P3.P5/(p25)P5	Ⅱ－２～３	3以上(-)×2(4.8)	(桁行) 2.4 (梁間) 2.4	東西	N2°W	ＳＢ10465より古
ＳＢ10465	建物５	(o24)P2.P6/(p24)P1.P3/(q24)P8/(q23)P5/(o25)P2/(p25)P10.P15/(q25)P9	Ⅱ－３	3(6.0)×2(3.6)	(桁行) 2.0 (梁間) 1.8	東西	N0°W	ＳＢ10466より古 ＳＢ10460より新
ＳＢ10466	建物６	(o24)P1.P5.P8/(p24)P5.P6.P7/(q24)P4.P13/(p25)p11/(q25)P10/	Ⅱ－３～４	3(5.4)×2(3.6)	(桁行) 1.8 (梁間) 1.8	東西	N2°E	ＳＢ10465より新
ＳＢ10469	建物８	(q23)P1/(r23)P2.P3.P4.P5/(q24)P3.P15/(r24)P7.P13	Ⅱ－２～３	3(6.0)×2(4.0)	(桁行) 2.0 (梁間) 2.0	東西	N3°W	ＳＫ10467より古 ＳＢ10471より新
ＳＢ10470	建物９	(q23)P2.P4/(r23)P6.P8.P12/(q24)P5.P7/(r24)P2.P11	Ⅱ－3～４	3(5.7)×2(3.8)	(桁行) 1.9 (梁間) 1.9	東西	N0°W	ＳＫ10467･ＳＢ10465より新
ＳＢ10471	建物７	(q23)P3/(r23)P1.P9/(s23)P1/(q24)P12.P14/(r24)P9.P15/(s24)P3	Ⅱ－２	3(6.0)×2(3.8)	(桁行) 2.0 (梁間) 1.9	東西	N2°W	ＳＢ10469より古 ＳＢ10475より新
ＳＢ10475	建物３	(r24)P8.P10/(s24)P2/(r25)P4.P6.P10/(s25)P3	Ⅱ－２	3以上(-)×2(4.2)	(桁行) 1.8 (梁間) 2.1	東西	N2°W	ＳＫ10247より古 ＳＢ10471より古

第Ⅱ－１表　第176次調査　掘立柱建物一覧表

遺構名	調査時遺構名	グリッド	時期	出土遺物	備考
ＳＤ0525	溝４	o23～r22	Ⅱ－１	土師器杯･甕、須恵器平瓶･甕	
ＳＫ10247	土坑１	r25	Ⅱ－２～３	土師器杯･皿･甕、灰釉陶器椀、製塩土器	
ＳＫ10461	土坑12	o24	Ⅱ期	土師器杯･甕･鍋、須恵器甕	
ＳＤ10462	溝５	op22	Ⅱ－１	土師器杯･甕	ＳＤ0525と並行する
ＳＫ10463	土坑８	p23	Ⅱ－３	土師器杯･皿･甕	
ＳＫ10464	土坑９	p23	Ⅱ期	土師器杯･甕	
ＳＫ10467	土坑７	q23	Ⅱ－３	土師器杯･皿･高杯･甕 須恵器杯･椀	
ＳＫ10468	土坑11	p22	Ⅱ－２	土師器杯･杯蓋･甕、須恵器甕	
ＳＫ10472	土坑６	r23	Ⅱ－２～３	土師器杯･甕	
ＳＫ10473	土坑３	qr24	Ⅱ－２～３	土師器杯･皿･甕、須恵器杯、灰釉陶器	
ＳＫ10474	土坑４	r24	Ⅱ－２	土師器杯･甕･鍋、須恵器杯蓋	
ＳＤ10476	溝６	rs24	Ⅱ期	土師器杯･甕	
ＳＫ10477	土坑10	s24	Ⅱ－２	土師器杯･甕	
ＳＤ10478	溝７	ps24	Ⅱ－１か	土師器杯･皿･甕、須恵器甕、灰釉陶器	ＳＢ10465･10466･10471･10475より古
ＳＤ10479	溝８	o1	近世	土師器皿、灰釉陶器	
ＳＫ10480	土坑５	p25	Ⅱ－２～３	土師器杯･椀･甕･台付鉢、製塩土器	

第Ⅱ－２表　第176次調査　遺構一覧表

Ⅱ－２～３期のものである。

ＳＢ10465（５～11） 土師器杯Ａ（５・６）は外反する口縁部で口径により大小のものがある。椀（７）は口径12㎝の小型のもので、口縁部は外反する。皿Ａ（８）は口縁部が外反する。須恵器杯Ｂ（９）は、底径15.4㎝の比較的大型の杯である。灰釉陶器皿（10）は、内面に厚く釉がかかる。椀（11）は内外面に施釉されるもので、内面に重ね焼きの痕跡が残る。黒笹90号窯式のもので、Ⅱ－３期のものとみられる。

ＳＢ10466（12・13） 土師器鍋（12）は口縁部がヨコナデされ端部が摘み上げられる。体部外面に粗いタテハケを施すものである。灰釉陶器椀（13）は、底部のみの破片で、内外面にツケ掛けで施釉され、黒笹90号窯式のものである。

ＳＢ10471（14） 土師器杯Ａ（14）は、口縁部がヨコナデされ外上方に伸びる。器壁が厚く、Ⅱ－２期に比定できる。

ＳＫ10247（15） 第168次調査で遺物は土師器杯・椀などコンテナで３箱出土している。今回の調査で出土した遺物は少ない。土師器皿（15）は、やや小型の皿で、底部が丸みを持つ。Ⅱ－２～３期ものである。

ＳＫ10480（16～18・47） 土師器杯Ａ（16）は、口径15.6㎝、底部内外面ナデ調整。椀Ａ（17）、皿Ａ（18）はいずれも底部内外面ナデ調整のもので、Ⅱ－２～３期のものである。墨書も１点確認でき、土師器杯Ａ（47）は口縁部がヨコナデされ、底部内外面ナデ調整のもので、底部外面に「拾」が墨書される。あるいは「於」「柊」「桧」の可能性もあろう。

ＳＫ10473（19） 土師器杯Ａ（19）は口径15.0㎝で、器壁が厚く、内弯する口縁を持つ。Ⅱ－２期のものである。

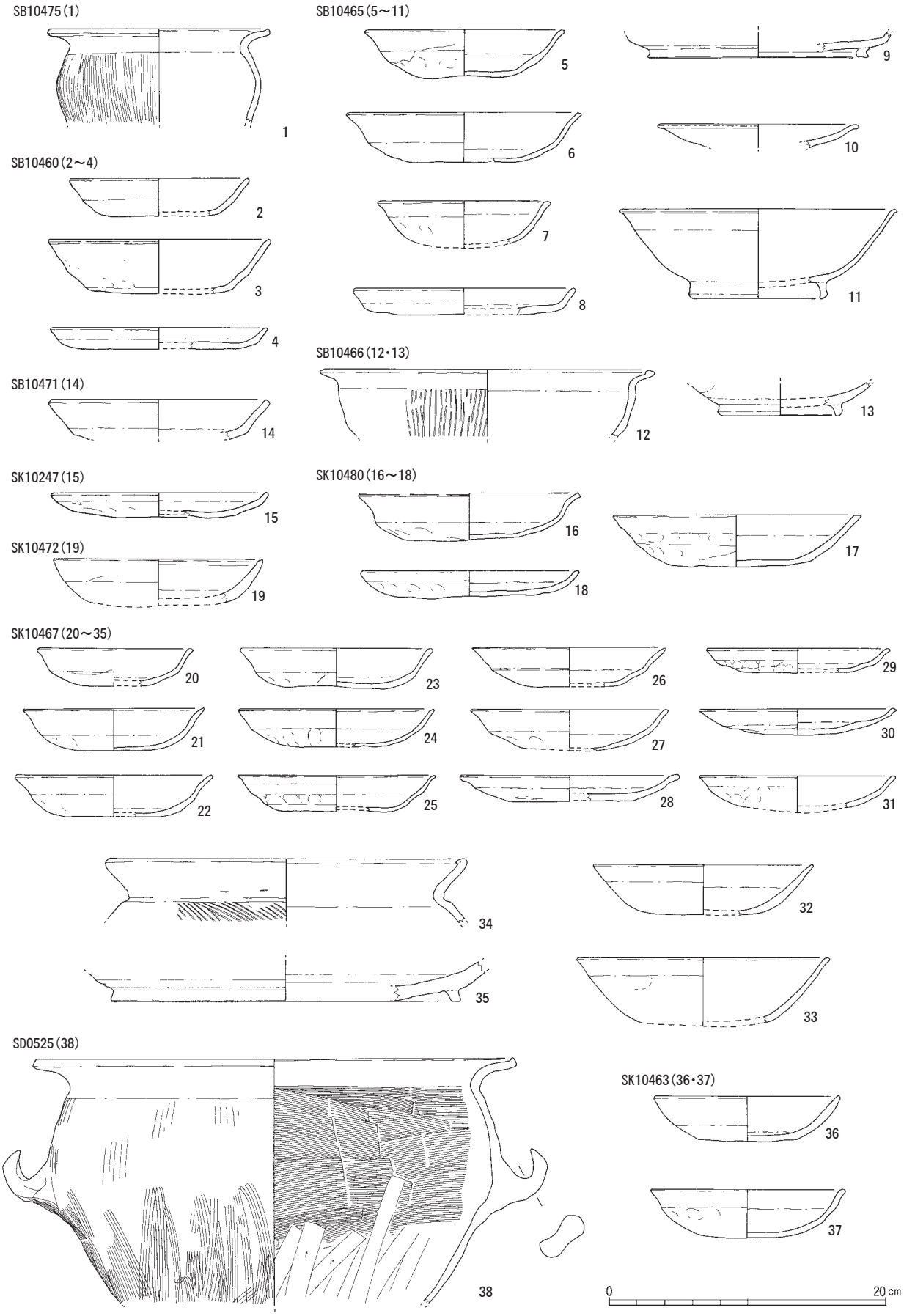
ＳＫ10471（20～35） 土師器杯（20～27）は、口縁部が外反して底部はやや丸みを持つ。口径10㎝ほどのもの（20）と13～14㎝のものがある。皿Ａ（28～31）は、歪みが大きいが、やや扁平な底部に内弯する口縁部をもつものである。甕（34）は口縁端部が折り曲げられ、奈良時代の長胴甕の系譜をひくもので体部は残存していないが、若干短くなるものである。須恵器鉢（35）は、大型の鉢の底部で、器壁は厚く、内面はナデで仕上げられる。Ⅱ－３期のものとみられる。

ＳＤ0525（38） 土師器鍋Ｂ（38）は、一対の把手がつくもので、口縁部は外反しながら摘み上げられ、体部外面はタテハケ後、ナデ調整が施され、その後体部下半のハケ目調整が施されるものである。Ⅱ－２期のものとみられる。

ＳＫ10463（36・37） 土師器杯Ａで、口縁部が外上方に伸びるもの（36）、口縁部が外反するもの（37）があり、いずれも口径13㎝程度のものである。Ⅱ－３期のものであろう。

Pit・包含層出土（39～46・48・49）

Pit出土（46）は、須恵器底部外面に墨書の残るものである。外面の内側はロクロケズリが施され、外側はロクロナデである。皿の底部になる可能性が高い。包含層出土（39～45）のものはいずれもグリッド番号ｒ25から出土したもので、当初は黒ボク上面で土坑２として取り上げたものである。遺構検出を行っていく中で、柱穴が明確でないことから周辺を下げていった結果、範囲が不明となり、再検出の結果、ＳＫ10480を確定した。このため、柱穴の遺物などが混入している可能性が高いことから包含層出土として報告するが、ＳＫ10480と同一の資料の可能性も高く、時期的にもⅡ－３期の範疇に納まるものである。このほか出土した墨書土器は３点ある。皿Ａ（48）は口縁部が外反し、底部外面に一か所墨痕が残るが判読は不明である。椀（49）は丸い底部に口縁部が外上方に伸びるもので、口縁端部に油煙が残る。同一個体片の底部外面には墨痕が残るが判読は不明である。甕（39～41）は口縁端部が内弯する小型の甕で、体部内外面下半にヘラケズリが施されるもの（40）があり、他の２個体も同様の調整を行うものと思われる。鉢（42）は丸い体部に後円部が内弯しながら外上方に伸びるもので、体部内外面下半にヘラケズリが施される。灰釉陶器皿（44）は口径15.4㎝、灰釉はツケ掛けされるもので底部外面に高台の剥離痕が残る。緑釉陶器稜皿（45）は口径14.7㎝で内外面に釉が施される。猿投産のものである。



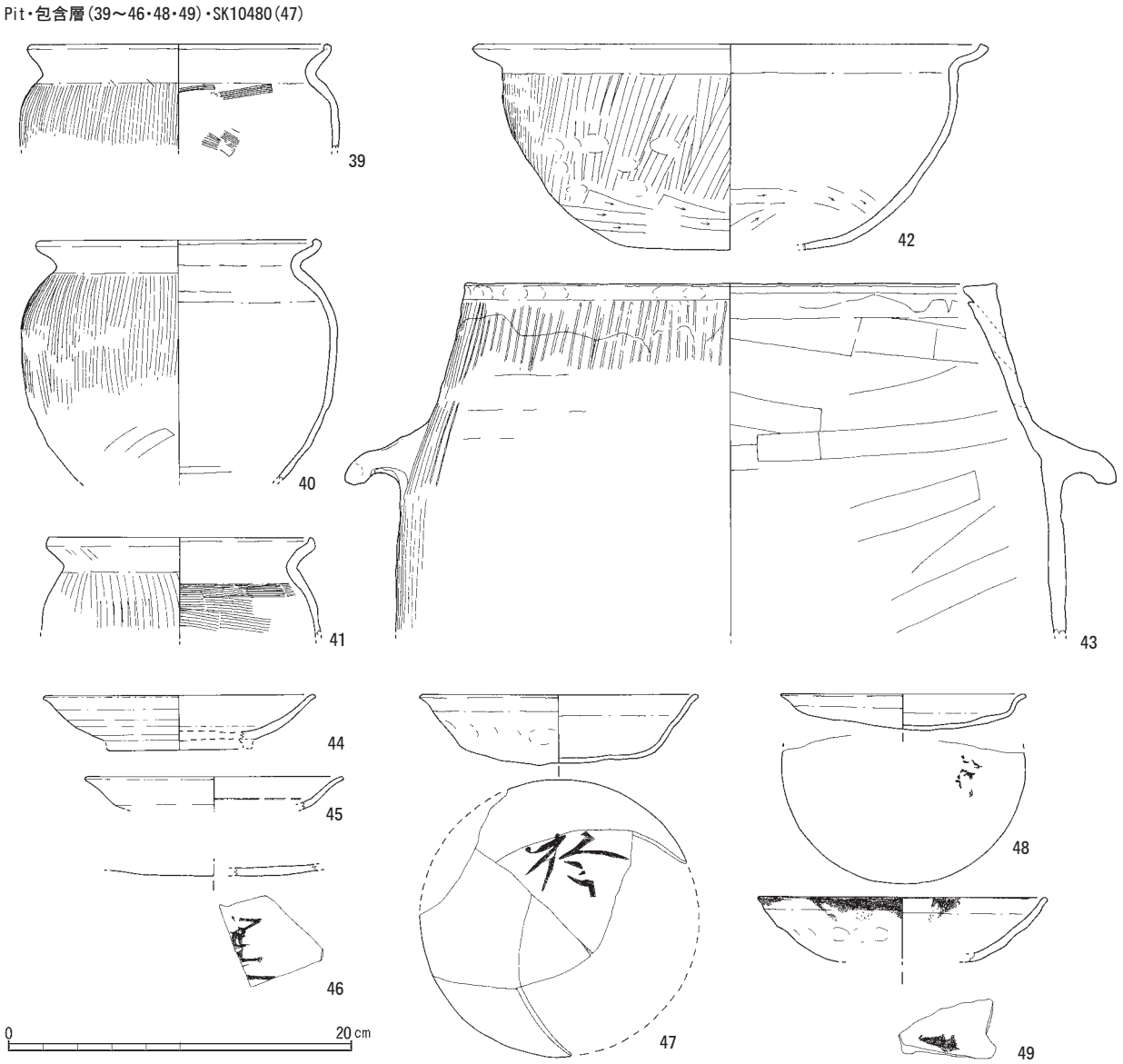
第Ⅱ－６図　第176次調査　遺物実測図（１）（1:4）

5　まとめ

本調査の調査面積は310㎡と決して広くはなかったが、柳原区画の北側に隣接する下園東区画の実態を明らかにできた。

まず、平成22年度の第168次調査で南側柱筋が確認されていたＳＢ10241は想定どおり５間×２間の規模をもつことが確認できた。これは、下園東区画内にⅡ－２期においてほぼ等間隔に立ち並ぶ５間×２間の規模を持つ掘立柱建物群を構成する遺構の１つであることを確認できたことを意味する。Ⅱ－２期において、下園東区画に寮庫を想定させる建物群が存在し、その一端を明らかにできた意義は大きい。

一方で本調査区内では、Ⅱ－２期からⅡ－３～４期までの遺構が集中して検出された一方で、Ⅰ期に遡る遺構や、Ⅲ期に下る遺構は検出されなかったほか、Ⅱ－１期の遺構は確認されたものの検出数は非常に少なかった。また、出土遺物についてもⅡ期の範疇、とりわけⅡ－２～３期の遺物が多く、同様の傾向を示している。このことは下園東区画の中でも当該調査地を含む区画南東部は、Ⅱ－２期に本格的な土地利用を開始し、Ⅲ期には衰退していた可能性を示している。実年代としては９世紀第２四半期から10世紀前半頃までが想定できよう。同じ下園東区画の中でも北東隅ではⅢ期に下る遺構も検出されていることから、区画内の利用については場所によ



第Ⅱ－７図　第176次調査　遺物実測図（２）（1:4）

って違いがあった事を示していると考えられる。

同様のことは微視的に本調査区を見た場合にもあてはまる。本調査区内では、ＳＤ0525の北側では掘立柱建物がまったく検出されなかった。これは、ＳＤ0525が区画溝として何らかの機能を持ち、それが本調査区における本格的な土地利用の終了まで一定程度機能していたことを示唆する。本調査区の約３ｍ東側に位置する第10次調査区においても、空白地が存在する。こうしたことから、１つの区画内にも、土地の利用方法には違いがあることが想定でき、今後そうした違いについても評価を積み重ねていく必要があるだろう。

遺物としては墨書土器が出土していることを特記しておこう。特にⅡ－２～３期に属する漢字墨書土器は「拾」あるいは「於」「柊」「桧」と読めるものである。斎宮跡出土の土器で漢字が記されるのは口径13～17㎝のものが最も多いが、当該遺物も口径16㎝を測り、この範疇におさまる。漢字墨書土器の典型的な類例として重要なものである。

（伊藤　文彦）

番号	器種	器形	地区 遺構	法量（cm）		調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考	登録 番号
1	土師器	甕	SB10475	推定口径 残高	15.8 6.8	外面:ヨコナデ、ハケメ 内面:ヨコナデ、ナデ	密（～1.0㎜砂粒含）	良	橙5YR6/6	口縁部1/12未満	内面一部に煤付着	009-01
2	土師器	杯	SB10460	推定口径 器高	12.8 2.7	外面:ヨコナデ、オサエ・ナデ 内面:ヨコナデ、ナデ	密（～1.0㎜砂粒含）	良	橙7.5YR7/6	口縁部1/12		009-03
3	土師器	杯	SB10460	推定口径 器高	15.8 3.9	外面:ヨコナデ、オサエ・ナデ、ナデ 内面:ヨコナデ、ナデ	密（～1.0㎜砂粒含）	良	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部1/12		009-02
4	土師器	皿	SB10460	推定口径 器高	15.4 1.6	外面:ヨコナデ、オサエ・ナデ 内面:ヨコナデ、ナデ	密（～2.0㎜砂粒含）	良	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部3/12		007-01
5	土師器	杯	SB10465	口径 器高	14.0 3.5	外面:ヨコナデ、オサエ・ナデ 内面:ヨコナデ、ナデ	密（～0.5㎜砂粒含）	良	にぶい黄橙10YR7/4	口縁部4/12	粘土接合痕あり	006-02
6	土師器	杯	SB10465	推定口径 器高	16.4 3.6	外面:ヨコナデ、オサエ・ナデ 内面:ヨコナデ、ナデ	密（～1.0㎜砂粒含）	良	橙5YR6/6	口縁部5/12	2片あり	006-01
7	土師器	椀	SB10465	推定口径 残高	12.0 3.1	外面:ヨコナデ、オサエ・ナデ 内面:ヨコナデ、ナデ	密	良	橙5YR6/6	口縁部1/12		009-06
8	土師器	皿	SB10465	推定口径 器高	15.6 1.9	外面:ヨコナデ、オサエ・ナデ 内面:ヨコナデ、ナデ	密（～0.5㎜砂粒含）	良	にぶい橙7.5YR6/4	口縁部2/12	内外面ともに摩滅、煤付着	009-04
9	須恵器	杯Ｂ	SB10465	残高 推定底径	1.9 15.4	外面:ロクロナデ、貼付高台、糸切り痕 内面:ロクロナデ	密（～1.0㎜砂粒含）	良	黄灰2.5Y6/1	底部1/12未満		009-08
10	灰釉陶器	皿	SB10465	推定口径 残高	13.8 1.7	外面:ロクロナデ	密	良	釉:灰黄2.5Y7/2 素地:灰白2.5Y7/1	口縁部2/12	内面に施釉	009-07
11	灰釉陶器	椀	SB10465	推定口径 器高 底径	19.4 6.5 9.2	外面:ロクロナデ、貼付高台、糸切り痕 内面:ロクロナデ	密（～2.5㎜砂粒含）	良	釉:抹茶色838 素地:灰白2.5Y8/1	口縁部1/12未満 底部2/12	内面底部に重ね焼痕あり、全面に施釉、ただし内面底部はごく薄い施釉	010-05
12	土師器	鍋	SB10466	推定口径 残高	23.2 4.9	外面:ヨコナデ、ハケメ 内面:ヨコナデ、板ナデ	密（～0.5㎜砂粒と小石含）	良	浅黄橙10YR8/4	口縁部1/12未満		010-01
13	灰釉陶器	椀	SB10466	残高 推定底径	2.2 8.1	外面:ロクロナデ、貼付高台、糸切り痕 内面:ロクロナデ	密（～1.0㎜砂粒含）	良	釉:青白橡989 素地:灰黄2.5Y7/2	底部1/12	外面に施釉、内面にまばらに施釉、重ね焼き痕あり	010-02
14	土師器	杯	SB10471	推定口径 残高	15.3 2.9	外面:ヨコナデ、オサエ・ナデ 内面:ヨコナデ、ナデ	密（～0.5㎜砂粒含）	良	橙5YR7/6	口縁部1/12		010-04
15	土師器	皿	SK10247	口径 器高	15.4 1.8	外面:ヨコナデ、オサエ・ナデ 内面:ヨコナデ、ナデ	密（～1.0㎜砂粒と小石含）	良	橙5YR6/6	口縁部8/12	粘土接合痕あり	003-01
16	土師器	杯	SK10480	口径 器高	15.6 3.5	外面:ヨコナデ、オサエ・ナデ 内面:ヨコナデ、ナデ	密（～1.5㎜砂粒含）	良	橙2.5YR6/6	口縁部11/12		003-05
17	土師器	椀	SK10480	口径 器高	17.6 3.7	外面:ヨコナデ、オサエ・ナデ 内面:ヨコナデ、ナデ	密（～0.5㎜砂粒含）	良	橙5YR6/6	口縁部10/12	粘土接合痕あり	003-06
18	土師器	皿	SK10480	口径 器高	15.4 2.0	外面:ヨコナデ、オサエ・ナデ 内面:ヨコナデ、ナデ	密（～1.0㎜砂粒含）	良	橙5YR7/6	ほぼ完形		003-04
19	土師器	杯	SK10472	推定口径 残高	15.0 3.1	外面:ヨコナデ、ナデ 内面:ヨコナデ、ナデ	密	良	橙5YR6/8	口縁部2/12	粘土接合痕あり	003-07

第Ⅱ－３表　第176次調査　遺物観察表（１）

番号	器種	器形	地区 遺構	法量(cm)		調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考	登録 番号
20	土師器	杯	SK10467	推定口径 器高	10.6 2.7	外面:ヨコナデ、オサエ・ナデ 内面:ヨコナデ、ナデ	密	良	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部3/12	粘土接合痕あり	011-06
21	土師器	杯	SK10467	推定口径 器高	13.0 3.0	外面:ヨコナデ、オサエ・ナデ 内面:ヨコナデ、ナデ	密(～0.5㎜砂粒含)	良	橙7.5YR7/6	口縁部2/12		013-03
22	土師器	杯	SK10467	推定口径 器高	14.0 3.0	外面:ヨコナデ、オサエ・ナデ 内面:ヨコナデ、ナデ	密	良	灰白10YR8/2	口縁部2/12		011-07
23	土師器	杯	SK10467	口径 器高	13.6 2.9	外面:ヨコナデ、オサエ・ナデ 内面:ヨコナデ、ナデ	密(～1.0㎜砂粒含)	良	橙7.5YR7/6	口縁部5/12	粘土接合痕あり	011-04
24	土師器	杯	SK10467	口径 器高	14.0 2.7	外面:ヨコナデ、オサエ・ナデ 内面:ヨコナデ、ナデ	密(～2.0㎜砂粒と小石含)	良	橙7.5YR7/6	口縁部4/12		013-06
25	土師器	杯	SK10467	推定口径 残高	14.0 2.6	外面:ヨコナデ、オサエ・ナデ 内面:ヨコナデ	密(～1.0㎜砂粒含)	良	黄橙7.5YR7/8	口縁部3/12		013-01
26	土師器	杯	SK10467	推定口径 残高	14.0 2.8	外面:ヨコナデ、オサエ・ナデ 内面:ヨコナデ、ナデ	密(～1.0㎜砂粒含)	良	黄橙7.5YR7/8	口縁部3/12		013-04
27	土師器	杯	SK10467	口径 残高	13.9 3.0	外面:ヨコナデ、オサエ・ナデ 内面:ヨコナデ、ナデ	密(～1.0㎜砂粒含)	良	にぶい橙7.5YR7/4	ほぼ完形	歪みあり	011-03
28	土師器	皿	SK10467	推定口径 残高	15.4 1.9	外面:ヨコナデ、オサエ・ナデ 内面:ヨコナデ、ナデ	密	良	橙5YR7/6	口縁部3/12		011-02
29	土師器	皿	SK10467	推定口径 残高	13.0 1.7	外面:ヨコナデ、オサエ・ナデ 内面:ヨコナデ	密	良	橙7.5YR7/6	口縁部3/12	粘土接合痕あり	013-05
30	土師器	皿	SK10467	口径 器高	13.8 1.9	外面:ヨコナデ、オサエ 内面:ヨコナデ、ナデ	密	良	橙7.5YR7/6	口縁部10/12	粘土接合痕あり	011-01
31	土師器	皿	SK10467	推定口径 残高	14.0 2.3	外面:ヨコナデ、オサエ・ナデ 内面:ヨコナデ	密	良	黄橙7.5YR7/8	口縁部3/12		013-07
32	土師器	椀	SK10467	推定口径 器高	15.6 3.7	外面:ヨコナデ、オサエ・ナデ 内面:ヨコナデ、ナデ	やや密(～1.5㎜砂粒含)	良	浅黄橙10YR8/3	口縁部2/12	内外面とも剥離	011-05
33	土師器	椀	SK10467	推定口径 残高	18.0 4.7	外面:ヨコナデ、オサエ・ナデ 内面:ヨコナデ	密	良	橙7.5YR7/6	口縁部2/12		013-02
34	土師器	甕	SK10467	推定口径 残高	25.3 4.6	外面:ヨコナデ、ハケメ 内面:ヨコナデ、工具ナデ	密(～1.0㎜砂粒含)	良	浅黄橙7.5YR8/4	口縁部1/12	粘土接合痕あり	012-01
35	須恵器	鉢	SK10467	残高 底径	2.9 25.0	外面:ロクロケズリ、貼付高台、糸切り痕 内面:ロクロナデ	密(～2.5㎜砂粒含)	良	黄灰2.5Y6/1	底部1/12	底部外面に円状のヘラ痕あり	012-02
36	土師器	杯	SK10463	口径 器高	13.1 3.3	外面:ヨコナデ、オサエ・ナデ 内面:ヨコナデ、ナデ	密	良	浅黄橙10YR8/4	口縁部4/12		003-03
37	土師器	杯	SK10463	口径 器高	13.7 3.5	外面:ヨコナデ、オサエ・ナデ 内面:ヨコナデ、ナデ	密(～2.0㎜砂粒と小石含)	良	橙5YR7/6	口縁部8/12	粘土接合痕あり	003-02
38	土師器	鍋	SD0525	推定口径 残高	32.4 17.7	外面:ヨコナデ、ハケメ、オサエ・ナデ 内面:ヨコナデ、ハケメ、オサエ、ケズリ	密(～2.5㎜砂粒含)	良	浅黄橙10YR8/4	口縁部5/12	把手2個あり	005-01
39	土師器	甕	包含層	推定口径 残高	17.1 6.1	外面:ヨコナデ、ハケメ 内面:ヨコナデ、ハケメ	密(～1.0㎜砂粒含)	良	にぶい黄橙10YR7/3	口縁部3/12	煤付着	001-06
40	土師器	甕	包含層	推定口径 残高	15.8 14.0	外面:ヨコナデ、ハケメ、ケズリ 内面:ヨコナデ、板ナデ、ケズリ	密(～1.0㎜砂粒と小石含)	良	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部7/12	外面に広く煤付着、粘土接合痕あり、多数の土器片あり	002-02
41	土師器	甕	包含層	推定口径 残高	15.1 5.9	外面:ヨコナデ、ハケメ 内面:ヨコナデ、ハケメ	密(～0.5㎜砂粒含)	良	にぶい橙7.5YR6/4	口縁部2/12		001-05
42	土師器	鍋	包含層	推定口径 器高	29.0 12.0	外面:ヨコナデ、オサエ・ハケメ、ケズリ 内面:ヨコナデ、板ナデ、ケズリ	密(～3.0㎜砂粒含)	良	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部2/12		002-03
43	土師器	竈	包含層	推定口径 残高	30.5 20.4	外面:ナデ、オサエ、ハケメ、オサエ・ナデ 内面:ナデ、ケズリ、オサエ	密(～1.5㎜砂粒含)	良	浅黄橙7.5YR8/3	口縁部5/12	粘土接合痕あり、破片多数あり	008-01
44	灰釉陶器	皿	包含層	推定口径 推定器高	15.4 3.2	外面:ヨコナデ、ヘラケズリ 内面:ヨコナデ、ナデ	密(～1.0㎜砂粒含)	良	釉:砂色800 素地:灰黄2.5Y7/2	口縁部2/12	外面にごくうすい施釉、内面に施釉、底部剥離	001-07
45	緑釉陶器	皿	包含層	推定口径 残高	14.7 1.9	外面:ロクロナデ 内面:ロクロナデ	密(～1.0㎜砂粒含)	良	釉:威光茶990	口縁部1/12未満	全面に施釉	014-04
46	須恵器	皿	r24 P6	残高	0.7	外面:ロクロナデ、糸切り痕 内面:ロクロナデ	密(～0.5㎜砂粒含)	良	褐灰7.5YR5/1	一片	墨書あり	015-01
47	土師器	杯	SK10480	口径 器高	15.8 4.1	外面:ヨコナデ、オサエ・ナデ 内面:ヨコナデ、ナデ	密(～2.0㎜砂粒と小石含)	良	橙5YR7/6	口縁部6/12	底部に墨書あり、粘土接合痕あり	014-03
48	土師器	皿	包含層	推定口径 器高	13.9 2.1	内面:ヨコナデ、オサエ・ナデ 外面:ヨコナデ、ナデ	密(～2.0㎜砂粒含)	良	橙7.5YR7/6	口縁部6/12	墨痕あり、粘土接合痕あり	014-01
49	土師器	椀	包含層	推定口径 残高	16.6 3.8	外面:ヨコナデ、オサエ・ナデ 内面:ヨコナデ、ナデ	密(～2.0㎜砂粒含)	良	にぶい橙7.5YR6/4	口縁部9/12	墨痕あり、口縁部に油煙あり、他に数片あり	014-02

第Ⅱ－４表　第176次調査　遺物観察表（２）

調査区全景（北から）

ＳＢ10241（北から）

写真図版Ⅱ－２　第176次調査遺構（２）

ＳＢ10469・10470（北から）

ＳＢ10465・10466（東から）

ＳＢ10469・10470・10471（西から）

ＳＢ10242・10475（西から）

写真図版Ⅱ－４　第176次調査遺物

5

6

20

23

27

28

30

38

46

47

Ⅲ　第177次調査
（６ＡＱ９・Ｒ９　下園東地区）

１　はじめに

第177次調査区は、史跡東部に位置する方格地割の北部、下園東区画に位置している。下園東区画では、これまで第８-10・10・18-１・18-２・23・47・166・168・173・174-8・176次調査が行われており、平安時代の掘立柱建物や区画東辺の道路が確認されている。下園東区画では、これまでに平安時代前期の５間×２間の東西棟建物が区画東半部で６棟確認されており、東隣の西加座北区画と同様に規則的に配置された建物群が存在する可能性がある。今回の調査は、こうした建物群が下園東区画の西半部まで広がるかを確認する目的で実施した。

調査は平成24年10月５日から平成25年２月14日まで実施し、調査面積は543㎡であった。

２　地形と層位

調査区は標高9.9～10.1m程度の平坦地であり、現況は多目的広場として利用されている。調査区の南側は低地部が広がっており、平成21年度に行われた第166次調査では、土取り等によって地形が改変されていることが確認されたが、もともと東西に伸びる浅い谷状地形であったと考えられる。

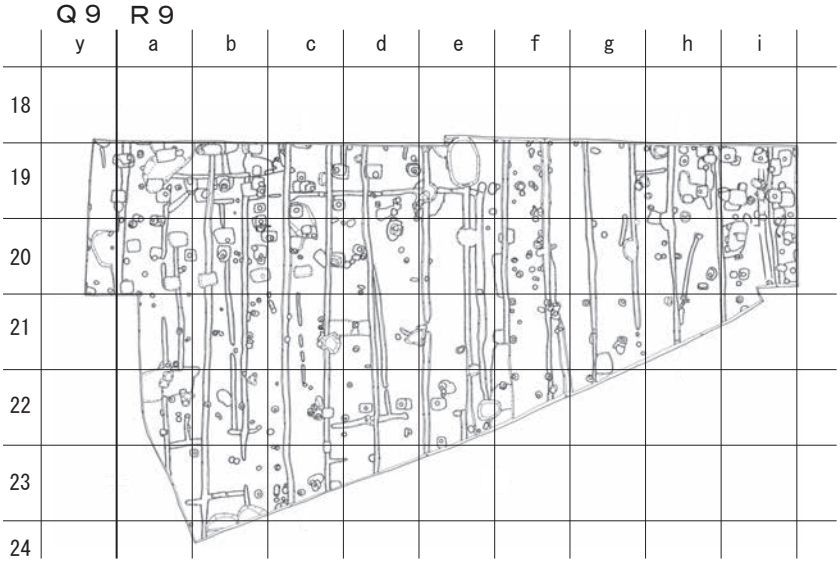
基本層位は、砕石・盛土の下に褐灰色砂質土が約0.1～0.2m堆積し、表土下0.3～0.5mで灰白色粘土層の地山面を確認した。遺構は、この灰白色粘土層上面で検出している。

３　遺構

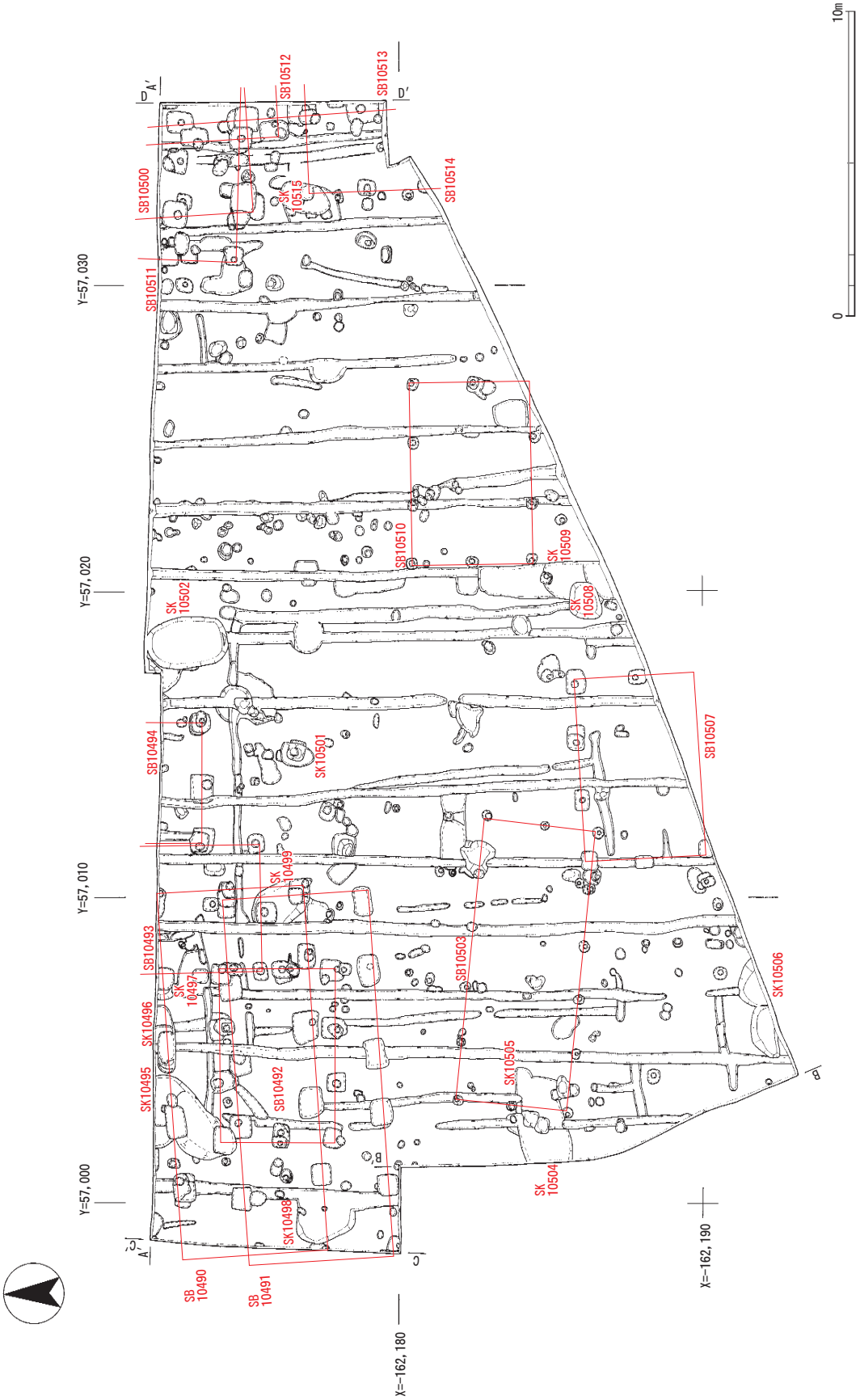
この調査では、主として平安時代前期から中期を主体とする掘立柱建物13棟、土坑13基を確認した。

（１）斎宮Ⅱ－１期の遺構

ＳＢ10491　調査区北西部に位置する桁行５間×梁間２間の東西棟。柱間は桁行・梁間ともに2.4mで、棟方向はＮ４°Ｗを測る。柱掘形は一辺0.6～1.1mの隅丸方形もしくは隅丸長方形を呈する。遺構の重複関係からＳＫ10490・10498・10499に先行する。土師器皿・甕、須恵器杯・甕が出土しており、出土



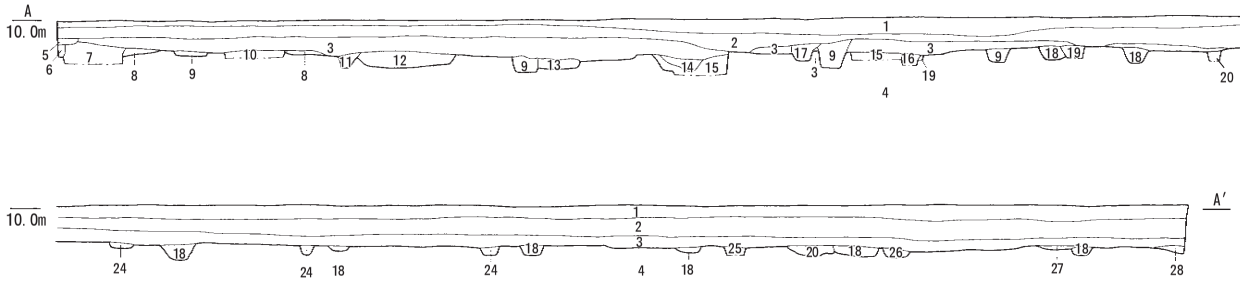
第Ⅲ－１図　第177次調査　大地区・グリッド図（1:400）



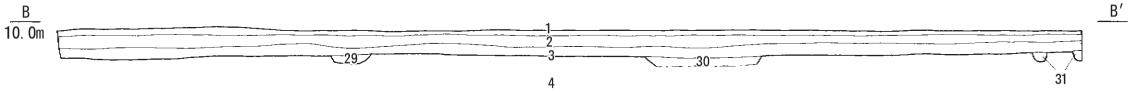
第Ⅲ－２図　第177次調査　遺構平面図（1:200）

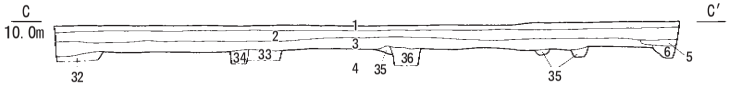
第Ⅲ－3図　第177次調査　土層断面図（1:100）

北壁断面図

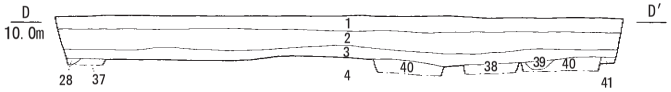


西壁断面図

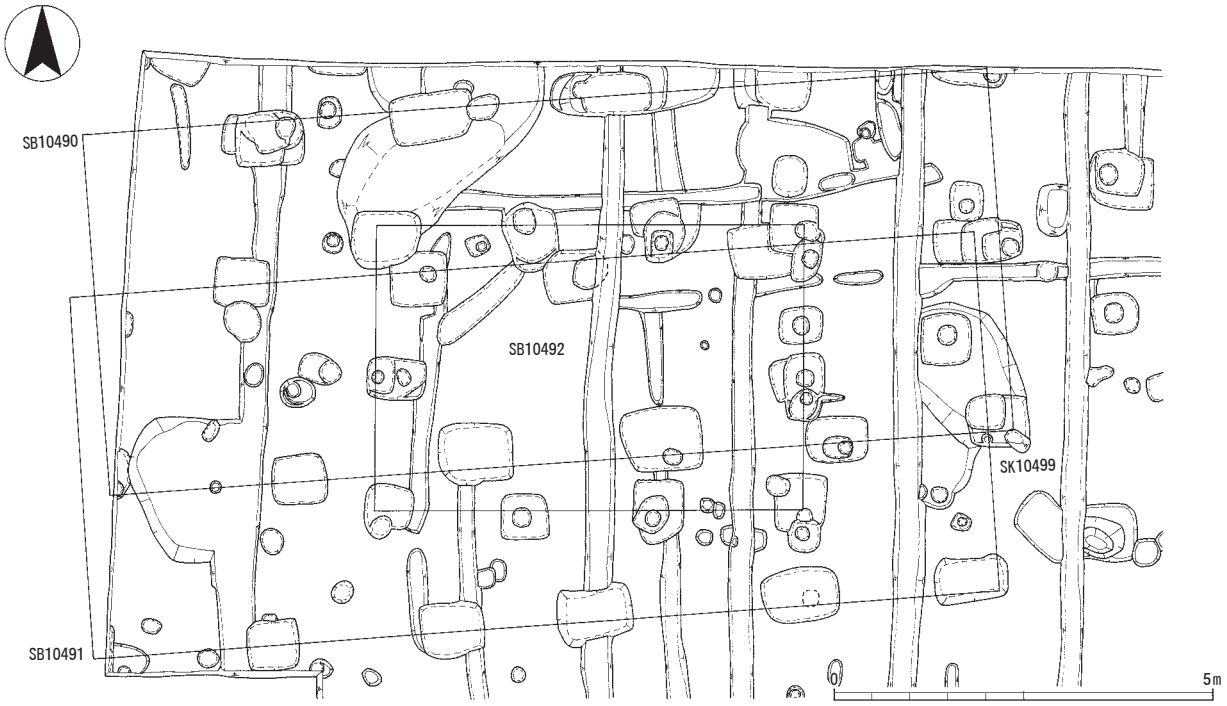




東壁断面図



1 砕石
2 橙色砂質土(5Y7/6)〔盛土〕
3 褐灰色砂質土(10YR4/1)
4 灰白色粘土(10YR8/1)〔地山〕
5 褐灰色砂質土(10YR5/2)に地山ブロック含む
6 黒褐色砂質土(2.5Y3/1)
7 暗灰黄色砂質土(2.5Y5/2)に地山ブロック・土器含む
8 灰白色粘土(10YR8/1)に褐灰色砂質土(10YR4/1)含む
9 にぶい黄褐色砂質土(10YR5/4)に地山ブロック含む〔攪乱溝〕
10 黒褐色砂質土(10YR3/1)に地山ブロック含む
11 褐灰色砂質土(10YR5/1)に地山ブロック含む
12 灰黄色砂質土(10YR4/2)に炭・土器含む〔SK10495〕
13 黄灰色砂質土(2.5Y5/2)に地山ブロック多く含む
14 黄灰褐色砂質土(10YR5/2)に地山ブロック多く含む〔SB10490〕
15 黒褐色砂質土(10YR3/1)に地山ブロック多く含む〔SB10490〕
16 黄灰色砂質土(2.5Y4/1)に炭・土器多く含む〔SB10490柱痕状遺構〕
17 黒色砂質土(10YR2/1)〔攪乱〕
18 黄灰色砂質土(10YR5/1)に地山土含む〔攪乱溝〕
19 黄灰色砂質土(2.5Y4/1)
20 黄灰色砂質土(2.5Y4/1)
21 黄灰色砂質土(2.5Y4/1)に地山ブロック少し含む
22 灰黄褐色砂質土(10YR4/2)に地山ブロック・炭・土器を含む
23 灰黄褐色砂質土(10Y4/2)に地山ブロック含む〔SK10502〕
24 黄灰色砂質土(2.5Y4/1)
25 黒褐色砂質土(2.5Y3/1)に地山ブロック含む
26 黄灰色砂質土(2.5Y4/1)〔SB10511〕
27 褐灰色砂質土(10YR4/1)に地山土含む
28 暗灰黄色砂質土(2.5Y5/2)
29 黄灰色砂質土(2.5Y4/1)に地山ブロック含む〔攪乱溝〕
30 黒褐色シルト(10YR3/1)
31 暗灰黄色砂質土(2.5Y4/2)
32 黄灰色砂質土(2.5Y4/1)に地山ブロック含む〔SB10491〕
33 黄灰色砂質土(2.5Y4/1)に地山ブロック含む〔SB10490〕
34 黄灰色砂質土(2.5Y5/1)に炭やや含む〔SB10490・柱痕〕
35 灰黄褐色砂質土(2.5Y4/1)に地山土含む
36 褐灰色砂質土(2.5Y4/1)に地山ブロック・炭含む
37 黄灰色砂質土(2.5Y4/1)に地山ブロック多く含む
38 黒褐色砂質土(2.5Y3/1)
39 黒褐色砂質土(2.5Y3/2)〔SB10514〕
40 黄灰色砂質土(2.5Y5/1)に黒褐色砂質土(2.5Y3/1)多く含む〔SB10514〕
41 灰黄色砂質土(2.5Y6/2)



第Ⅲ－４図　第177次調査　ＳＢ10490・10491・10492平面図（1:100）

遺物からこの時期に属すると考えられる。

ＳＢ10507　調査区南端で確認した桁行３間×梁間２間の東西棟で、南側柱筋は調査区外に展開する。棟方向はＮ４°Ｗで、柱間は桁行・梁間とも2.0ｍを測る。柱掘形は一辺約0.4～0.8ｍの隅丸方形を呈する。土師器皿（１）や甕が僅かに出土しているのみだが、Ⅱ－１期の遺構と判断した。

ＳＢ10513　調査区東端で確認した桁行３間以上の南北棟で、西側柱のみを確認しており、大半は調査区外に展開する。棟方向はＮ４°Ｗで、柱間は桁行2.0ｍを測る。柱掘形は一辺約0.7～1.1ｍの隅丸方形を呈する。土師器甕が僅かに出土した。遺構の重複関係からＳＢ10500・10511・10512・10514に先行する。

（２）斎宮Ⅱ－２期の遺構

ＳＢ10490　調査区北西部で確認した桁行５間×梁間２間の東西棟である。柱間は桁行・梁間ともに2.4ｍで、棟方向はＮ４°Ｗを測る。柱掘形は一辺0.6～1.1ｍの隅丸方形もしくは隅丸長方形を呈する。遺構の重複関係からＳＫ10498・10499に先行し、ＳＢ10491より後出する。土師器杯（３～５）・皿（６）・甕（７）・甑（８）が出土しているが、３～６は北東角柱掘形の柱痕状遺構からまとまって出土している。まとまって出土した土器は、Ⅱ－１期に属するが、５がＳＢ10491の柱掘形から出土した破片と接合することから、ＳＢ10491の柱掘形を壊してＳＢ10490の柱掘形を掘削した際に混入し、柱抜取時に崩落したものと考えられる。また、この建物は、下園東区画内で規則的に配置された建物群にあたることも併わせて、Ⅱ－２期に属すると判断した。

ＳＢ10500　調査区北東部に位置する桁行１間以上×梁間１間以上の建物で、遺構の大半は調査区外に展開する。棟方向はＮ４°Ｗを測り、柱掘形は一辺0.8～1.1ｍの隅丸方形もしくは隅丸長方形を呈する。遺物は土師器甕が出土したのみである。建物位置や棟方位から、ＳＢ10490と同様に規則的に配置された建物群の一つと考えられ、Ⅱ－２期のものと判断した。

ＳＢ10511　調査区北東部に位置する桁行２間以上×梁間１間以上の建物で、柱間は桁行2.0ｍ・梁間2.1ｍを測る。棟方向はＮ２°Ｅ。柱掘形は一辺約0.6ｍの隅丸方形を呈する。遺物は土師器杯（９）、須恵器杯が出土しており、Ⅱ－２期に属する。遺構の重複関係より、ＳＢ10500・10513より後出する。

遺構名	調査時遺構名	ピット番号 ※(　)はグリッド番号	時期	規模 間(m)×間(m)	柱間寸法(m)	主軸	方位 (N規準)	備考
ＳＢ10490	建物１	(a19)P11/(b19)P3・P9/(c19)P5/(a20)P2・P5/(b20)P2/(c20)P1・P12	Ⅱ－２	5(12.0)×2(4.8)	(桁行) 2.4 (梁間) 2.4	東西	N4°W	ＳＫ10498・10499より古 ＳＫ10491より新
ＳＢ10491	建物２	(a19)P3・P12/(c19)P4/(a20)P1・P3/(b20)P3・P10/(c20)P3	Ⅱ－１	5(12.0)×2(4.8)	(桁行) 2.4 (梁間) 2.4	東西	N4°W	ＳＫ10490・10499より古
ＳＢ10492	建物３	(a19)P2・P7/(b19)P6・P8/(a20)P4・P7・P8/(b20)P1・P5・P8	Ⅱ－２～３	3(5.7)×2(3.8)	(桁行) 1.9 (梁間) 1.9	東西	N0°W	ＳＢ10491より新
ＳＢ10493	建物４	(b19)P1・P2/(c19)P2	Ⅱ－３	2?(-)×2(4.2)	(桁行) 2.0 (梁間) 2.1	南北	N1°W	ＳＫ10497・10499より古 ＳＢ10494より新
ＳＢ10494	建物５	(d19)P3・P4	Ⅱ－２～３	－　×2(4.0)	(桁行) － (梁間) 2.0	南北	N0°W	ＳＢ10493より古
ＳＢ10500	建物８	(i19)P4・P7	Ⅱ－２	－　×　－	(桁行) － (梁間) －	東西	N4°W	ＳＢ10511よりも古 ＳＢ10513よりも新
ＳＢ10503	建物12	(a20)P1・P5/(b21)P1/(d21)P1/(a22)P1/(b22)P1・P2/(c22)P1・P5/(d22)P1・P2	Ⅲ？	5(9.25)×2(3.7)	(桁行) 1.85 (梁間) 1.85	東西	N6°E	ＳＫ10504より新
ＳＢ10507	建物14	(c22)P1/(e22)P1・P2/(c23)P1	Ⅱ－１	3(6.0)×2(3.0)	(桁行) 2.0 (梁間) 2.0	東西	N4°W	
ＳＢ10510	建物13	(f21)P2・P3・P4/(g21)P1・P3/(g22)P1	Ⅱ－３～	3(6.0)×2(3.0)	(桁行) 2.0 (梁間) 2.0	東西	N1°W	
ＳＢ10511	建物６	(i19)P3・P13	Ⅱ－２	3?(-)×2?(-)	(桁行) 2.0 (梁間) 2.1	東西	N2°E	ＳＢ10500・10513より新
ＳＢ10512	建物９	(i19)P1・P6・P14	Ⅱ－２	－　×　－	(桁行) － (梁間) －	?	N4°W	ＳＢ10513より新
ＳＢ10513	建物10	(i19)P2	Ⅱ－１	3?　×　－	(桁行) 2.0 (梁間) －	南北	N4°W	ＳＢ10500・10511・10512・10514より古
ＳＢ10514	建物11	(i20)P6	Ⅱ－２～４？	2?×　2?	(東西) 2.4 (南北) 2.0	?	N2°W	ＳＫ10515より古 ＳＢ10513より新

第Ⅲ－１表　第177次調査　掘立柱建物一覧表

遺構名	調査時遺構名	グリッド	時期	出土遺物	備考
ＳＫ10495	土坑５	a19-b19	Ⅱ－３	土師器皿、須恵器甕、灰釉陶器段皿	ＳＢ10490より新
ＳＫ10496	土坑４	b19	Ⅱ－２～３	土師器甕、須恵器蓋・甕	ＳＢ10490より新
ＳＫ10497	土坑６	b19-c19	Ⅱ－４～	土師器	ＳＢ10493より新
ＳＫ10498	土坑７	y20	Ⅱ－３	土師器杯・皿・甕、須恵器杯・甕、灰釉陶器皿	ＳＢ10490より新
ＳＫ10499	土坑１	c19-c20	Ⅱ－３	土師器杯・皿・甕・甑、須恵器杯・蓋・甕、灰釉陶器椀、志摩式製塩土器	ＳＢ10490・10491・10493より新
ＳＫ10501	土坑２	d20	Ⅱ	土師器甕、須恵器	
ＳＫ10502	土坑３	e19	Ⅱ－２	土師器杯・皿・椀・甕・鍋・甑、須恵器杯蓋・甕・壺、土錘、志摩式製塩土器	
ＳＫ10504	土坑13	a22-b22	Ⅱ－２	土師器杯・甕、須恵器甕	ＳＢ10503より古 ＳＫ10505より新
ＳＫ10505	土坑14	a22-b22	～Ⅱ－２	土師器	ＳＫ10504より古
ＳＫ10506	土坑11	b23	Ⅱ－４	土師器杯・甕、須恵器甕、灰釉陶器椀	
ＳＫ10508	土坑９	e22-f22	Ⅱ－２	土師器杯・甕	ＳＫ10509より新
ＳＫ10509	土坑10	e22-f22	Ⅱ－２	土師器杯・皿・甕、須恵器盤	ＳＫ10508より古
ＳＫ10515	土坑８	h20-i20	Ⅱ－４～	－	ＳＢ10514より新

第Ⅲ－２表　第177次調査　遺構一覧表

ＳＢ10512　調査区北東部に位置する梁間１間以上の建物で、棟方向はＮ４°Ｗを測る。柱掘形は一辺0.6～0.9ｍの隅丸長方形を呈する。遺物は土師器皿（11）・甕、灰釉陶器蓋（10）のほか、転用硯と考えられる須恵器杯蓋の小片が出土した。出土遺物からⅡ－２期に属し、ＳＢ10500に重複することから、建替えの可能性が考えられる。

ＳＫ10502　調査区中央北端に位置する土坑で、長径2.7ｍ以上×短径1.6ｍの楕円形を呈し、深さ0.4ｍを測る。土師器杯（12～20）・皿（21～24）・椀（25）・甕（26）・鍋（27）・甑、須恵器杯蓋・甕（28・29）・壺、志摩式製塩土器などが出土した。２条の切れ込みが入る大型の土錘（30）や拳大の石英塊も出土し、祭祀に関わる遺構の可能性も考えられる。

ＳＫ10504　調査区西端に位置する土坑で、長径2.7ｍ以上×短径1.6ｍの長方形を呈し、深さ0.1ｍを測る。土坑の西半は、調査区外に展開する。土師器杯・甕、須恵器甕が出土した。

ＳＫ10505　ＳＫ10504と重複する土坑で、直径0.6ｍの楕円形を呈し、深さ0.05ｍを測る。遺構の重複関係から、ＳＫ10504に先行する。

ＳＫ10508　調査区中央南端に位置する土坑で、長径1.2ｍ×短径1.1ｍの楕円形を呈し、深さ0.2ｍを測る。土師器杯・甕（31）が出土した。

ＳＫ10509　ＳＫ10508と重複する土坑で、長径1.3ｍ以上×短径1.2ｍの楕円形を呈する。南肩はＳＫ10508等により削平を受ける。土師器杯（32）・皿（33）・甕（34）、須恵器盤（35）が出土した。

（３）斎宮Ⅱ－２～３期の遺構

ＳＢ10492　調査区北西部に位置する桁行３間×梁間２間の東西棟で、北半部は調査区外に展開する。柱間は桁行・梁間ともに1.9ｍを測る。棟方向はＮ０°Ｗ。柱掘形は一辺約0.5～0.9ｍの隅丸方形もしくは隅丸長方形を呈し、柱痕は0.2～0.3ｍを測る。土師器杯（36）・甕、須恵器甕が出土した。遺構の重複関係より、ＳＢ10490・10491より後出する。

ＳＢ10494　調査区中央北部に位置する桁行１間以上×梁間２間の南北棟で、北側は調査区外に展開する。柱間は梁間で2.0ｍを測り、棟方向はＮ０°Ｗ。柱掘形は一辺約0.7～1.0ｍの隅丸長方形を呈し、柱痕は0.3ｍを測る。土師器杯・甕、須恵器甕が出土。遺構の重複関係より、ＳＢ10493に先行する。

ＳＫ10496　調査区北西部に位置する東西1.5ｍ×南北0.5ｍ以上の土坑で、北側は調査区外に展開する。深さ0.05ｍを測り、底部でＳＢ10490の柱掘形を確認した。土師器甕、須恵器蓋・甕が出土した。

（４）斎宮Ⅱ－３期の遺構

ＳＫ10495　調査区北西部に位置する土坑で、東西2.3ｍ×南北１ｍ以上の楕円形を呈し、調査区北側に展開する。遺構の南端は風倒木の痕跡によって境界が明瞭ではなかった。深さ0.15ｍを測り、底部でＳＢ10490の柱掘形を確認した。土師器皿、須恵器甕、灰釉陶器段皿（37）が出土した。

ＳＫ10498　調査区北西部に位置する土坑で、長径2.0ｍ×短径1.5ｍ以上の楕円形を呈し、深さ0.1ｍを測る。遺構の東肩は耕作溝によって削平を受ける。土師器皿（48）・杯（49）・甕（50）、須恵器杯・甕、灰釉陶器皿が出土している。遺構の重複関係よりＳＢ10490より後出する。

ＳＫ10499　調査区北西部に位置する土坑で、長径2.3ｍ×短径1.4ｍの楕円形を呈し、深さ0.2ｍを測る。遺構の西肩は耕作溝によって削平を受ける。土師器杯（38～41）・皿（42・43）・甕・甑、須恵器杯・蓋・壺（45）、灰釉陶器椀（46・47）、志摩式製塩土器が出土している。遺構の重複関係よりＳＢ10490・10491・10493より後出する。

（５）斎宮Ⅱ－３～４期の遺構

ＳＢ10493　調査区北西部に位置する桁行２間以上×梁間２間の南北棟で、北半部は調査区外に展開する。柱間は桁行2.0ｍ・梁間2.1ｍを測る。棟方向はＮ１°Ｗ。柱掘形は一辺約0.4～0.7ｍの隅丸方形もしくは隅丸長方形を呈し、柱痕は0.2～0.3ｍを測る。土師器杯・甕、須恵器壺が出土した。遺構の重複関係よりＳＢ10494より後出する。

（６）斎宮Ⅱ－４期の遺構

ＳＫ10506　調査区北西部に位置する土坑で、長径1.5ｍ×短径1.1ｍの不定形を呈し、深さ0.1ｍを測る。遺構の南半は調査区外に展開する。土師器杯・甕、須恵器甕、灰釉陶器椀が出土した。

（７）その他の遺構

ＳＢ10503　調査区北部に位置する桁行５間×梁間２間の東西棟で、柱間は桁行・梁間とも1.85ｍ。

棟方向はＮ６°Ｅ。柱掘形は直径約0.3〜0.4mの円形を呈し、柱痕は0.1〜0.15mを測る。土師器杯・皿・甕、須恵器甕が出土。柱掘形の形状や棟方向より、Ⅲ期に属するものと考えた。

ＳＢ10510　調査区南部に位置する桁行３間×梁間２間の東西棟で、柱間は桁行・梁間とも2.0mを測る。棟方向はＮ１°Ｗ。柱掘形は一辺約0.3〜0.4mの隅丸方形を呈し、柱痕は0.1〜0.2mを測る。土師器甕、須恵器、灰釉陶器が出土している。柱掘形の形状や出土遺物より、Ⅱ－３期以降のものと考えられる。

ＳＢ10514　調査区北部に位置する東西２間以上×南北２間の建物で、柱間は東西2.4m・南北2.0mを測る。建物方向はＮ２°Ｗ。柱掘形は一辺約0.4〜0.6mの隅丸方形もしくは隅丸長方形を呈する。遺構の重複関係からＳＢ10513より後出し、ＳＫ10515に先行する。柱掘形の形状や遺構の重複関係より、Ⅱ－２〜４期の間に属するものであろう。

ＳＫ10497　調査区南西部に位置する土坑で、東西1.6m以上×南北0.8m以上の楕円形を呈し、深さ0.1mを測る。土師器片が出土している。ＳＢ10493に後出することから、Ⅱ－４期以降のものである。

ＳＫ10501　調査区北西部に位置する土坑で、長径1.1m×短径0.7mの楕円形を呈し、深さ0.05mを測る。遺構の南半は調査区外に展開する。土師器甕、須恵器が出土し、Ⅱ期の遺構と考えられる。

ＳＫ10515　調査区東端に位置する土坑で、長径2.0m×短径1.3m以上の長方形を呈する。遺構の西肩は耕作溝によって削平を受ける。遺構の重複関係からＳＢ10514より後出し、Ⅱ－４期以降のものである。

４　遺物

（１）斎宮Ⅱ－１期の遺物

ＳＢ10507出土遺物（１）　土師器皿Ａで、器壁はやや厚い。口縁部には強いヨコナデが行われ、口縁端部内面に段を持つ。外面底部はケズリが施される。

（２）斎宮Ⅱ－２期の遺物

ＳＫ10490出土遺物（２〜８）　２は須恵器杯Ｂ蓋。内外面とも重ね焼きによる色むらが見られる。３〜５は土師器杯Ａ。３は器壁がやや厚く、にぶい黄橙色を呈する。４・５は橙色を呈する。５の体部内面中位から底部にかけて広く墨痕が残る。ＳＢ10491の北東角の柱掘形から出土した破片と接合することから、元々はＳＢ10491柱掘形に廃棄されていた可能性が高い。６は土師器皿Ａで、底部外面には粘土接合痕が残る。７は土師器甕Ａ。８は土師器甑で、外面に煤が付着する。遺物はⅡ－１期のものが多数含まれるが、これらはＳＢ10491の柱掘形が当建物を築造する際に破壊され、混入したものであろう。

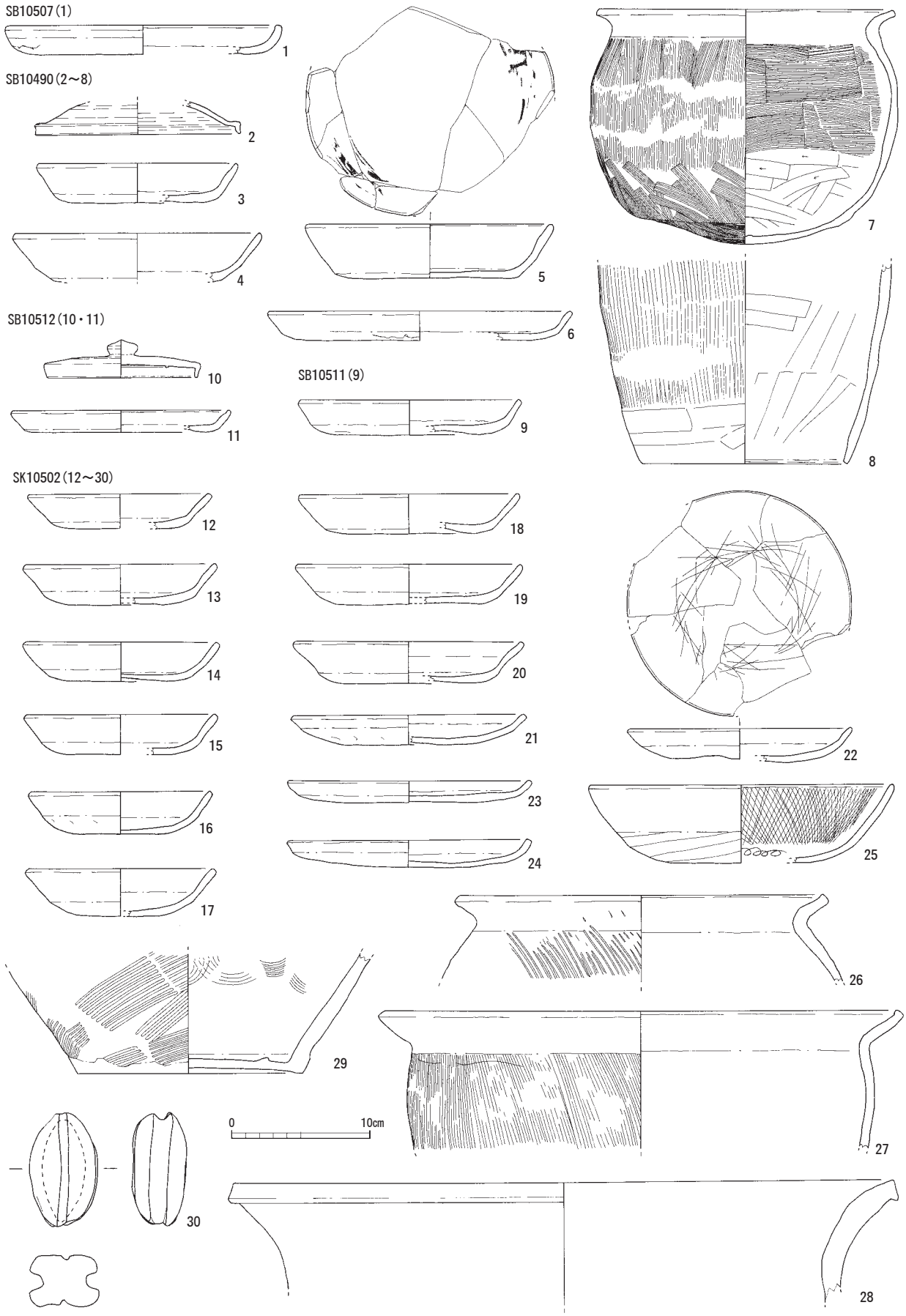
ＳＢ10511出土遺物（９）　９は土師器皿Ａで、強いヨコナデにより口縁端部内面に段を持つ。

ＳＢ10512出土遺物（10・11）　10は灰釉陶器で、壺の蓋か。外面全面に灰釉が施釉される。内面には重ね具の痕跡が付着する。11は土師器皿Ａ。口縁端部内面にはヨコナデによる段が見られる。

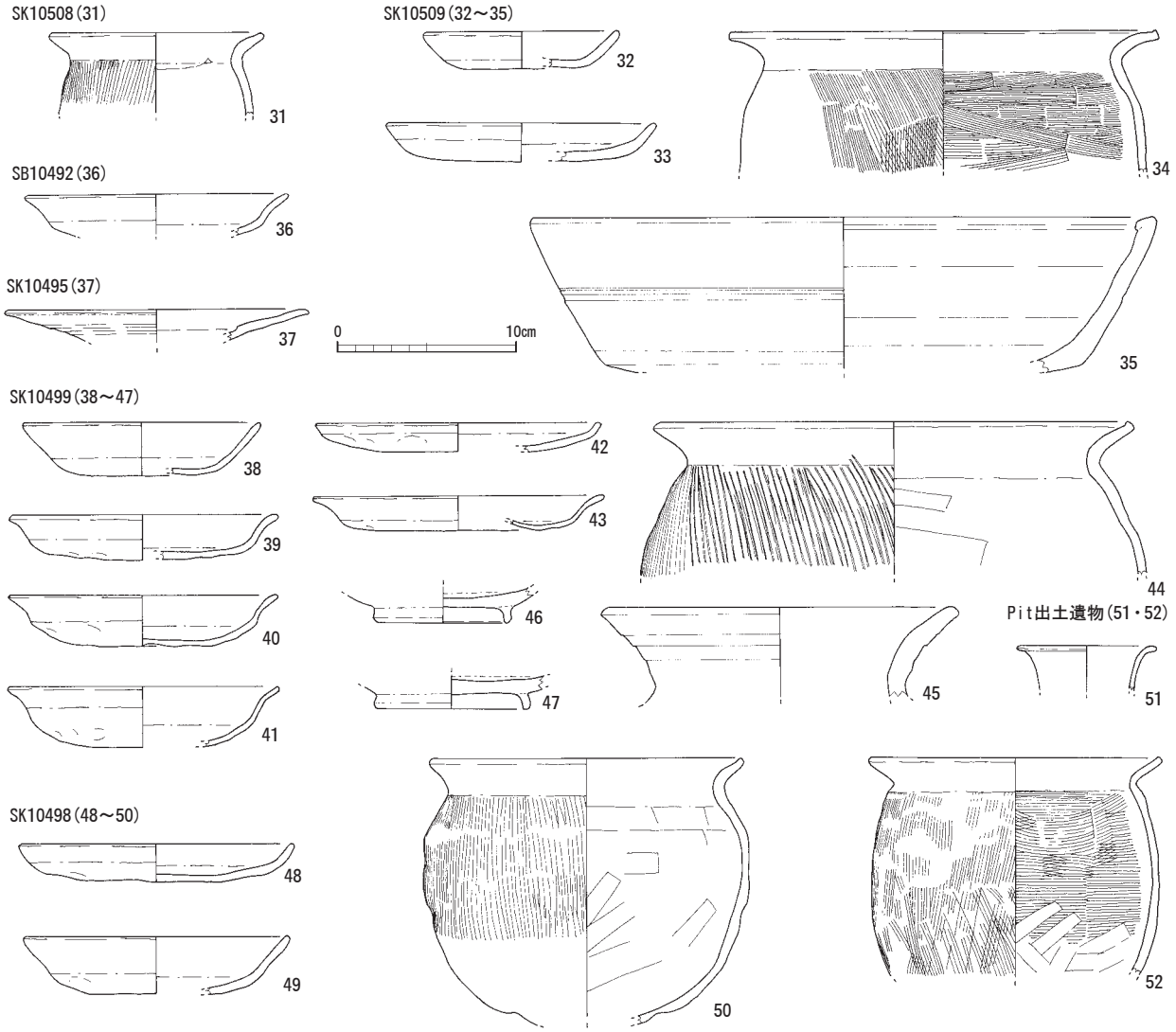
ＳＫ10502出土遺物（12〜30）　12〜20は土師器杯Ａ。口縁部は僅かに外反しながら外に開き、底部から体部下半にかけて指オサエ痕が残る。21〜24は土師器杯Ａ。22は体部下半から口縁部にかけて緩やかに立ち上がり、内面には複数の工具痕が円形状に残る。25は土師器椀Ａで、底部外面下半は全面にケズリが施される。体部内面には格子状暗文が、底部には螺旋状暗文が施される。26は土師器甕Ａで、体部外面には強いハケが施される。27は土師器鍋Ａ。口縁端部はつまみ上げられ、断面三角形を呈する。28は平底の須恵器甕Ｃで、体部外面にはタタキ痕が、体部内面には同心円状のタタキ痕が見られる。29は須恵器甕Ａで、大型のもの。口縁部は外反し、端部は垂下する。胎土に砂粒をやや含み、焼き膨れも見られる。30は有溝土錘で、幅1.2cmの溝と幅0.5cmの溝が刻まれる。重さは141ｇを計る大型のもので、外洋で用いられたものであろうか。祭祀などに使用された可能性も考えられる。

ＳＫ10508出土遺物（31）　31は土師器甕Ａで小型のもの。頸部内面には粘土接合痕が残る。

ＳＫ10509出土遺物（32〜35）　32は土師器杯Ａで内外面とも摩滅している。33は土師器皿Ａ。34は土師器甕Ａで、内外面ともハケが丁寧に施される。35は須恵器の盤で、焼成はやや弱く軟質である。口縁端部は上部内面に広い面を持ち、端部は内側に段を有する。体部外面中位には２条の沈線が巡る。



第Ⅲ－５図　第177次調査　遺物実測図（１）(1:4)



第Ⅲ－６図　第177次調査　遺物実測図（２）（1:4）

（３）斎宮Ⅱ－３期の遺物

ＳＢ10492出土遺物（36）　36は土師器杯Ａで、器壁は薄く、口縁部は外反しながら外に開く。

ＳＢ10495出土遺物（37）　37は灰釉陶器段皿で、精緻なつくりのもの。内面全面に薄く施釉される。

（４）斎宮Ⅱ－３～４期の遺物

ＳＫ10499出土遺物（38～47）　38～41は土師器杯Ａ。38は内外面とも摩滅が激しい。39は強いヨコナデにより体部と底部の間に段を持ち、口縁部が外反する。底部には指オサエ痕が残る。40・41も外反する口縁部を持つが、ともに器壁が薄い。41は体部上半まで指オサエが施され、より新しい様相を示す。42・43は土師器皿Ａ。42は口縁端部に面を持ち、底部外面には指オサエ痕が残る。43は口縁端部が外反し、器壁は薄い。44は土師器甕Ａで、口縁部内面には煤が付着する。45は須恵器甕Ｃで、口縁部外面は工具を用いた強いナデにより、段が見られる。46・47は灰釉陶器椀で、共に三日月状の貼付高台を持つ。これらはⅡ－３期のものが多数を占めるが、土師器杯の器壁が薄くなり、調整が粗雑化するものを含むなど、Ⅱ－４期に近い様相も窺える。

ＳＫ10498出土遺物（48～50）　48は土師器皿Ａ。49は土師器杯Ａで、体部下半から底部にかけて指オサエ痕が残る。50は土師器甕Ａ。球形の体部を呈し、内外面の一部に煤が付着する。

（５）その他の遺物

Pit出土遺物（51・52）　51は灰釉陶器の小型の壺。器壁は薄く、外面全体に灰釉が施釉される。52は土師器甕Ａで、体部はやや胴長の形状を呈する。

番号	器種	器形	地区 遺構	法量(cm)		調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考	登録 番号
1	土師器	皿A	SB10507	口径 器高	19.2 2.1	外面:ヨコナデ、ナデ、オサエ、ケズリ 内面:ヨコナデ、ナデ	密	良	橙5YR6/6	口縁部 1/12	粘土接合痕あり	010-05
2	須恵器	杯B蓋	SB10490	口径 残高	14.6 2.3	外面:ロクロナデ 内面:ロクロナデ	密	良	灰5Y6/1	口縁部 3/12		008-01
3	土師器	杯A	SB10490	口径 器高	14.2 2.9	外面:ヨコナデ、ナデ、オサエ 内面:ヨコナデ、ナデ	密	良	にぶい黄橙10YR6/4	口縁部 2/12		008-04
4	土師器	杯A	SB10490	口径 残高	17.6 3.5	外面:ヨコナデ、ナデ、オサエ 内面:ヨコナデ、ナデ	密	良	橙5YR6/6	口縁部 1/12		008-03
5	土師器	杯A	SB10490	口径 器高	17.5 4.0	外面:ヨコナデ、ナデ、オサエ 内面:ヨコナデ、ナデ	密	良	橙5YR6/6	口縁部 3/12	内面に墨痕	012-01
6	土師器	皿A	SB10490	口径 器高	21.6 2.1	外面:ヨコナデ、ナデ、オサエ 内面:ヨコナデ、ナデ	密	良	にぶい橙7.5YR6/4	口縁部 1/12	粘土接合痕あり	008-02
7	土師器	甕A	SB10490	口径 器高	21.1 17.0	外面:ヨコナデ、ハケ 内面:ヨコナデ、ハケ、ケズリ	密	良	にぶい橙7.5YR6/4	口縁部 3/12		009-01
8	土師器	甑	SB10490	残高 底径	14.5 14.6	外面:ハケ、ケズリ、ヨコナデ 内面:ケズリ、ヨコナデ	密	良	にぶい橙7.5YR6/4	底部 4/12	外面に煤付着	008-05
9	土師器	杯A	SB10511	口径 器高	15.7 2.5	外面:ヨコナデ、ナデ、オサエ 内面:ヨコナデ、ナデ	密	良	橙5YR6/6	口縁部 2/12	粘土接合痕あり	010-02
10	灰釉陶器	蓋	SB10512	口径 器高	10.7 2.7	外面:ロクロナデ 内面:ロクロナデ	密	良	釉:抹茶色838 素地:灰白2.5Y7/1	口縁部 小片	外面全面に施釉 内面に重ね具痕	010-04
11	土師器	皿A	SB10512	口径 器高	15.5 1.6	外面:ヨコナデ、ナデ、オサエ 内面:ヨコナデ、ナデ	密	良	橙2.5YR6/8	口縁部 1/12		010-03
12	土師器	杯A	SK10502	口径 器高	12.8 2.5	外面:ヨコナデ、ナデ、オサエ 内面:ヨコナデ、ナデ	密	良	橙5YR6/6	口縁部 2/12		004-05
13	土師器	杯A	SK10502	口径 器高	13.6 3.0	外面:ヨコナデ、ナデ、オサエ 内面:ヨコナデ、ナデ	密	良	橙5YR6/6	口縁部 2/12	粘土接合痕あり	003-02
14	土師器	杯A	SK10502	口径 器高	13.7 2.8	外面:ヨコナデ、ナデ、オサエ 内面:ヨコナデ、ナデ	密	良	橙2.5YR6/6	口縁部 2/12	内面黒褐色	003-06
15	土師器	杯A	SK10502	口径 器高	13.5 2.9	外面:ヨコナデ、ナデ、オサエ 内面:ヨコナデ、ナデ	密	良	橙5YR6/6	口縁部 2/12	粘土接合痕あり	004-06
16	土師器	杯A	SK10502	口径 器高	12.9 3.1	外面:ヨコナデ、ナデ、オサエ 内面:ヨコナデ、ナデ	密	良	にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 5/12		003-04
17	土師器	杯A	SK10502	口径 器高	13.2 3.5	外面:ヨコナデ、ナデ、オサエ 内面:ヨコナデ、ナデ	密	良	橙5YR7/6	口縁部 4/12	内面黒褐色	003-05
18	土師器	杯A	SK10502	口径 器高	15.8 2.9	外面:ヨコナデ、ナデ、オサエ 内面:ヨコナデ、ナデ	密	良	橙5YR6/6	口縁部 2/12		004-07
19	土師器	杯A	SK10502	口径 器高	16.0 2.9	外面:ヨコナデ、ナデ、オサエ 内面:ヨコナデ、ナデ	密	良	橙5YR7/6	口縁部 3/12	外面摩滅	003-03
20	土師器	杯A	SK10502	口径 器高	16.2 3.0	外面:ヨコナデ、オサエ・ナデ 内面:ヨコナデ、ナデ	密	良	橙5YR6/6	口縁部 5/12	粘土接合痕あり	004-04
21	土師器	皿A	SK10502	口径 器高	16.5 2.2	外面:ヨコナデ、ナデ、オサエ 内面:ヨコナデ、ナデ	密	良	橙5YR6/6	口縁部 1/12	粘土接合痕あり	003-01
22	土師器	皿A	SK10502	口径 器高	15.9 2.5	外面:ヨコナデ、ナデ、オサエ 内面:ヨコナデ、ナデ	密	良	橙2.5YR6/6	口縁部 8/12	内面に工具痕	011-02
23	土師器	皿A	SK10502	口径 器高	17.3 1.6	外面:ヨコナデ、ナデ、オサエ 内面:ヨコナデ、ナデ	密	良	橙5YR6/6	口縁部 3/12	粘土接合痕あり	004-02
24	土師器	皿A	SK10502	口径 器高	17.0 2.1	外面:ヨコナデ、ナデ、オサエ 内面:ヨコナデ、ナデ	密	良	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 4/12	粘土接合痕あり	004-03
25	土師器	椀A	SK10502	口径 器高	21.8 5.7	外面:ヨコナデ、ケズリ 内面:ヨコナデ、放射状・螺旋状暗文	密	良	橙5YR6/6	口縁部 3/12		003-07
26	土師器	甕A	SK10502	口径 残高	26.2 6.3	外面:ヨコナデ、ハケ 内面:ヨコナデ、工具ナデ	密	良	にぶい橙7.5YR7/3	口縁部 2/12	内面に煤付着	003-08
27	土師器	鍋A	SK10502	口径 残高	36.8 10.1	外面:ヨコナデ、ハケ 内面:ヨコナデ、工具ナデ	密	良	にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 2/12	内面に煤付着 粘土接合痕あり	004-01
28	須恵器	甕C	SK10502	口径 残高	47.6 7.7	外面:ロクロナデ 内面:ロクロナデ	密	良	灰7.5Y6/1	口縁部 1/12		005-02
29	須恵器	甕A	SK10502	残高 底径	8.7 16.3	外面:タタキ、ヨコナデ、未調整 内面:タタキ、不定ナデ、ナデ	密	良	黄灰2.5Y6/1	底部 7/12		005-01
30	土製品	土錘	SK10502	長さ 幅	8.2 4.3	—	密	良	にぶい橙7.5YR7/4	ほぼ 完形	重量:141g	011-01
31	土師器	甕A	SK10508	口径 残高	11.6 4.4	外面:ヨコナデ、ハケ、ナデ、オサエ 内面:ヨコナデ、ナデ	密	良	にぶい黄橙10YR6/4	口縁部 3/12	粘土接合痕あり	006-05

第Ⅲ－３表　第177次調査　遺物観察表（１）

番号	器種	器形	地区 遺構	法量(cm)		調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考	登録 番号
32	土師器	杯A	SK10509	口径 器高	10.7 2.1	外面:ヨコナデ、ナデ、オサエ 内面:ヨコナデ、ナデ	密	良	橙5YR6/6	口縁部 2/12	内外面とも摩滅	007-03
33	土師器	皿A	SK10509	口径 器高	14.7 2.1	外面:ヨコナデ、ナデ、オサエ 内面:ヨコナデ、ナデ	密	良	橙7.5YR7/6	口縁部 3/12		007-01
34	土師器	甕A	SK10509	口径 残高	23.7 8.0	外面:ヨコナデ、ハケ 内面:ヨコナデ、ハケ	密	良	にぶい橙7.5YR6/4	口縁部 3/12		007-04
35	須恵器	盤A	SK10509	口径 残高	34.5 8.7	外面:ロクロナデ、ケズリ 内面:ロクロナデ、ナデ	密	やや 良	灰黄2.5Y6/2	口縁部 8/12		007-02
36	土師器	杯A	SB10492	口径 残高	14.4 2.4	外面:ヨコナデ、ナデ、オサエ 内面:ヨコナデ、ナデ	密	良	橙5YR6/6	口縁部 2/12		010-01
37	灰釉陶器	段皿	SB10495	口径 残高	16.4 1.8	外面:ロクロナデ 内面:ロクロナデ	密	良	釉:利休白茶812 素地:灰白2.5Y7/1	口縁部 1/12	内面に施釉	006-01
38	土師器	杯A	SK10499	口径 器高	13.1 3.0	外面:ヨコナデ、ナデ、オサエ 内面:ヨコナデ、ナデ	やや 密	良	浅黄橙10YR8/4	口縁部 2/12	内外面とも摩滅	001-03
39	土師器	杯A	SK10499	口径 器高	14.5 2.5	外面:ヨコナデ、ナデ、オサエ 内面:ヨコナデ、ナデ	密	良	浅黄橙7.5YR8/4	口縁部 2/12		001-05
40	土師器	杯A	SK10499	口径 器高	14.7 2.9	外面:ヨコナデ、ナデ、オサエ 内面:ヨコナデ、ナデ	やや 密	良	にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 2/12	内外面とも摩滅	001-04
41	土師器	杯A	SK10499	口径 器高	15.0 3.4	外面:ヨコナデ、ナデ、オサエ 内面:ヨコナデ、ナデ	密	良	浅黄橙10YR8/3	口縁部 3/12		001-06
42	土師器	皿A	SK10499	口径 器高	15.5 1.6	外面:ヨコナデ、ナデ、オサエ 内面:ヨコナデ、ナデ	密	良	にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 2/12		001-01
43	土師器	皿A	SK10499	口径 器高	16.1 1.9	外面:ヨコナデ、ナデ、オサエ 内面:ヨコナデ、ナデ	やや 密	良	橙2.5YR6/8	口縁部 2/12		001-02
44	土師器	甕A	SK10499	口径 残高	26.0 8.5	外面:ヨコナデ、ハケ 内面:ヨコナデ、工具ナデ	密	良	にぶい黄橙10YR7/4	口縁部 2/12	内面に煤付着	002-01
45	須恵器	甕C	SK10499	口径 残高	19.1 5.0	外面:ロクロナデ、工具ナデ 内面:ロクロナデ	密	良	灰7.5Y6/1	口縁部 2/12		002-02
46	灰釉陶器	椀	SK10499	残高 底径	2.0 7.1	外面:ロクロナデ、貼付高台、糸切痕 内面:ロクロナデ	密	良	釉:抹茶色838 素地:灰白2.5Y7/1	底部 6/12		001-07
47	灰釉陶器	椀	SK10499	残高 底径	1.9 8.3	外面:ロクロナデ、貼付高台、糸切痕 内面:ロクロナデ	密	良	釉:青白橡989 素地:灰白10YR8/1	底部 1/12		001-08
48	土師器	皿A	SK10498	口径 器高	15.1 2.1	外面:ヨコナデ、ナデ、オサエ 内面:ヨコナデ、ナデ	密	良	橙5YR6/6	口縁部 5/12		006-03
49	土師器	杯A	SK10498	口径 器高	14.5 3.2	外面:ヨコナデ、ナデ、オサエ 内面:ヨコナデ、ナデ	密	良	橙5YR6/6	口縁部 3/12		006-02
50	土師器	甕A	SK10498	口径 残高	17.2 14.9	外面:ヨコナデ、ハケ、ナデ、オサエ 内面:ヨコナデ、工具ナデ、ケズリ	密	良	にぶい橙5YR7/4	口縁部 3/12	内外面に一部煤付着	006-04
51	灰釉陶器	壺	y20 Pit1	口径 残高	7.3 2.6	外面:ロクロナデ 内面:ロクロナデ	密	良	釉:抹茶色838 素地:灰白5Y8/1	口縁部 3/12		010-06
52	土師器	甕	c20 Pit20	口径 残高	16.0 12.2	外面:ヨコナデ、ハケ 内面:ハケ、ケズリ	密	良	橙5YR6/6	口縁部 4/12		009-02

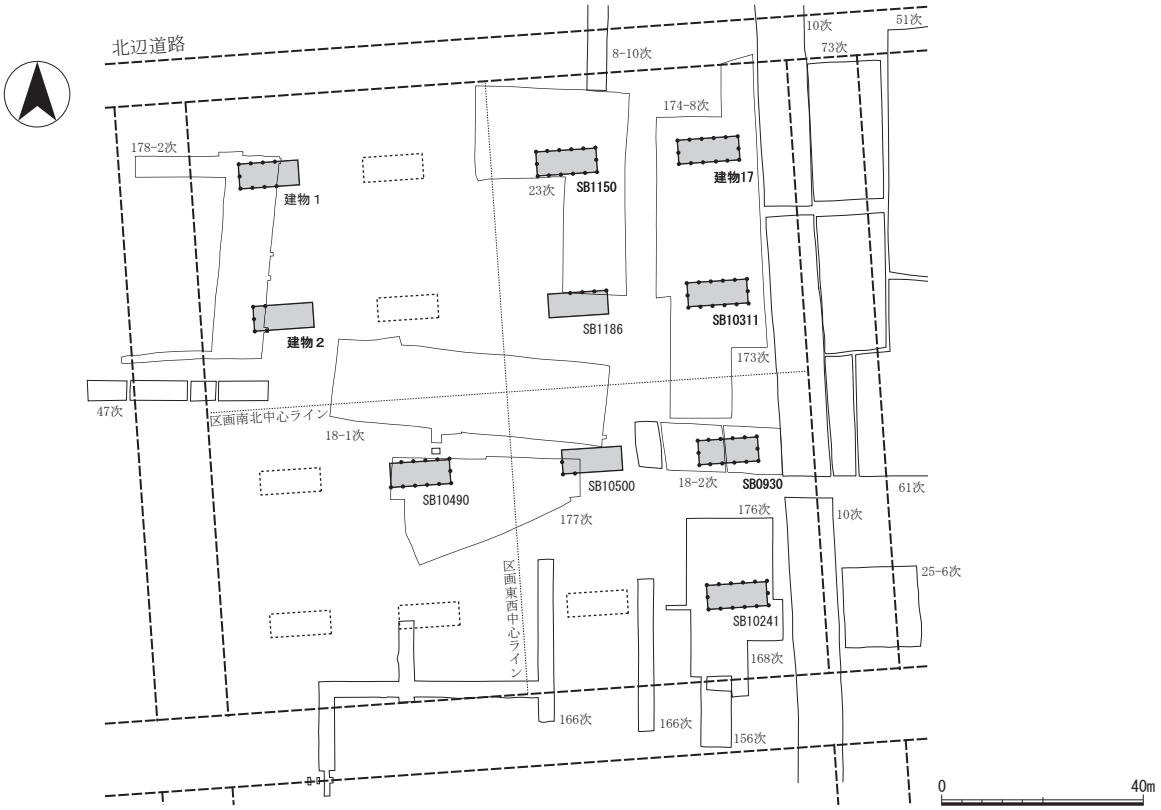
第Ⅲ－４表　第177次調査　遺物観察表（２）

５　まとめ

今回の調査は、下園東区画内に規則的に配置される建物の確認および区画中央部附近の実態解明を目的としている。

（１）下園東区画の建物群について

下園東区画内では、これまでの調査で、棟方向もＮ４°～3.5°Ｗを示す桁行５間×梁間２間の東西棟が６棟（ＳＢ0930・1150・1186・10241・10311、第174-8次建物15）確認されている。今年度の調査でも、今回確認したＳＢ10490・10500や、第178-2次調査の建物１・２についても、これらの建物群と同じ配置計画に基づいて配置されたとみられる建物である。これまでは、下園東区画の東半部でしかこれらの建物群は確認できていなかったが、今年度の調査結果により、５間×２間の建物群が、区画の西半部にまで広がることが確認された。これにより、下園東区画においても、西加座北区画と同様に、東西４列・南北４列の合計16棟の建物が区画内に規則的に並んでいたと想定できる。こうした建物群のうち、西加座北区画では13棟、下園東区画では10棟を確認した事となる。両区画は、区画の東西幅が



第Ⅲ－７図　177次調査　下園東区画主要建物配置図（Ⅱ－２期）

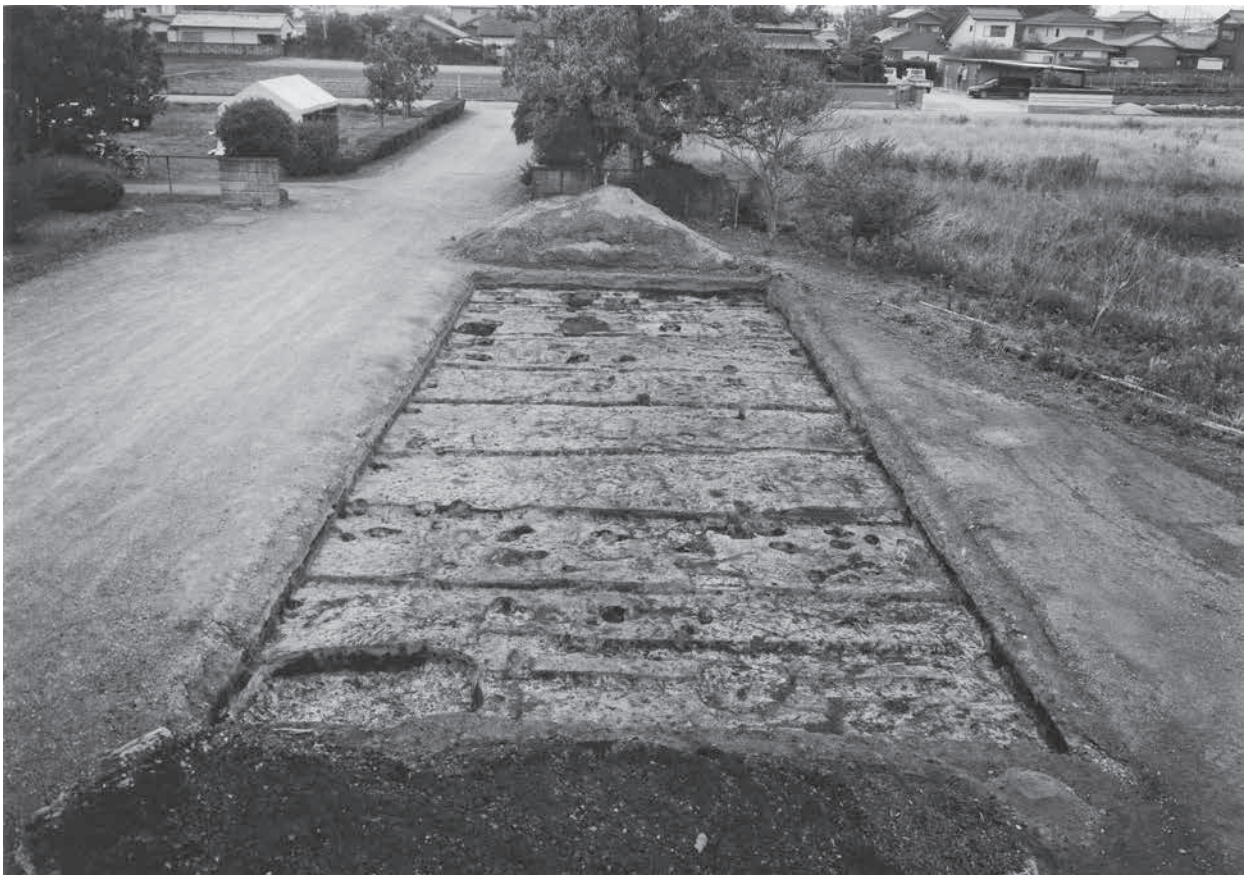
違うため、建物群の中央２列の建物の東西間隔が大きく異なるものの、他の建物配置は概ねよく似ている。両区画とも区画全体にある程度間隔を空けて均等に配置していることや、方格地割の北辺部に位置することを考えると、倉庫として使用された可能性が高い。ただ、建物群の時期については、西加座北区画の建物群がⅡ－１期に属するのに対し、下園東区画の建物群は、各建物からの出土遺物や遺構の重複関係を再検討した結果、Ⅱ－２期に属すると判断でき、両者は併存しない可能性が考えられる。

下園東区画では、翌年度も調査が行われる予定である。今後の調査成果に期待すると共に、これまでの調査成果の精査を行い、建物群の性格や変遷について、更なる検討を進めたい。

（２）区画中央部附近の様相について

本調査区は、区画中央部のやや南に位置している。下園東区画では、平安時代前期のⅡ－１期以前に遡る遺構は少なく、また、平安時代後期にあたるⅢ－１期以降は、遺構・遺物ともに減少し、掘立柱建物は北辺道路沿を除いてほとんど見られなくなる。今回の調査でも平安時代前期から中期の遺構が大半を占め、他の調査区と同様の傾向を示している。ただし、Ⅱ－１期に遡る掘立柱建物は３棟確認しており、５間×２間の建物群が成立する以前も、区画中央部には何らかの施設が存在していたと考えられる。また、Ⅱ－２～４期の建物は調査区の北東部か北西部に集中し、中央部や南部に建物があまり見られないことから、５間×２間の建物配置を踏襲した建替えが行われていた可能性も考えられよう。

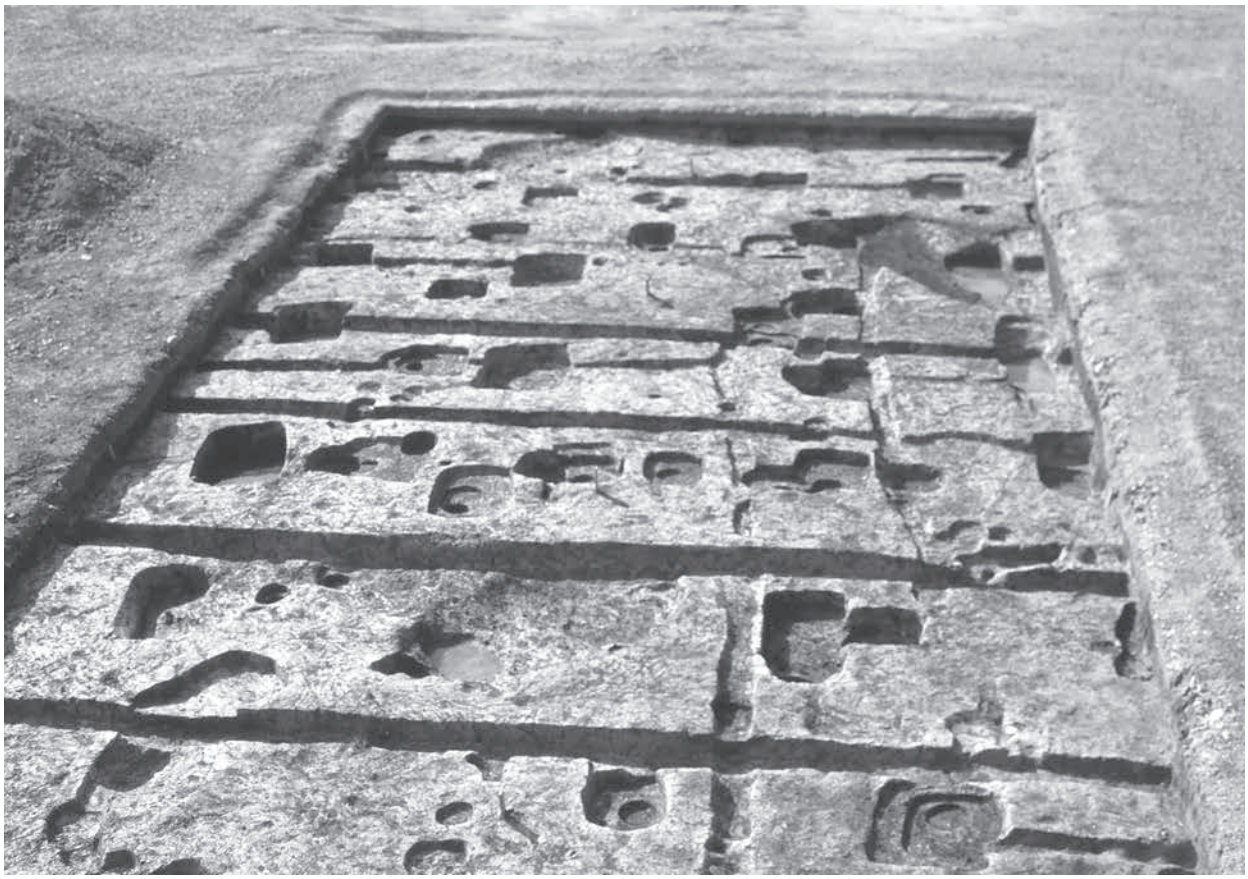
（新名　強）



調査区東部全景（西から）

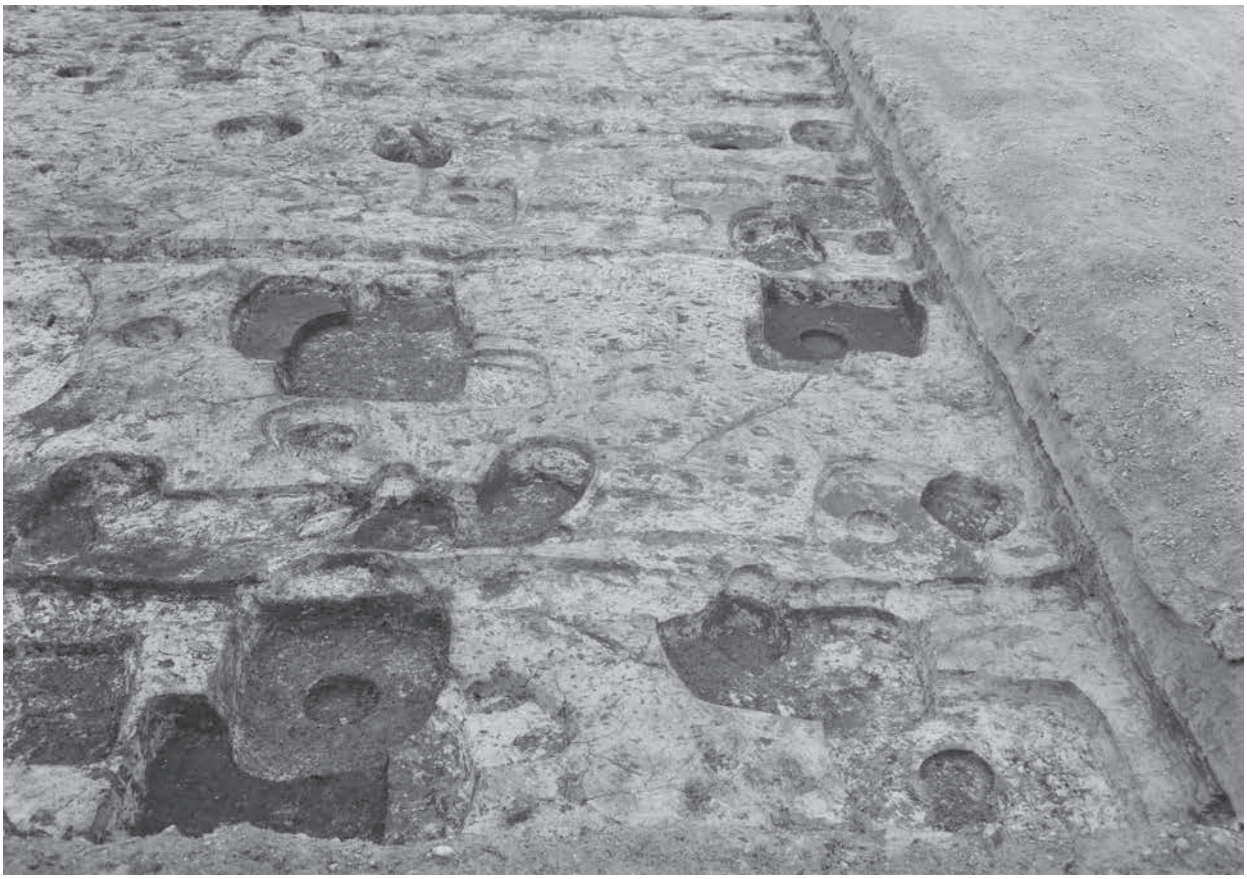
調査区南部全景（西から）

写真図版Ⅲ－２　第177次調査遺構（２）



ＳＢ10490・10491・10492（東から）

ＳＢ10494（東から）



ＳＢ10500・10511・10512（東から）

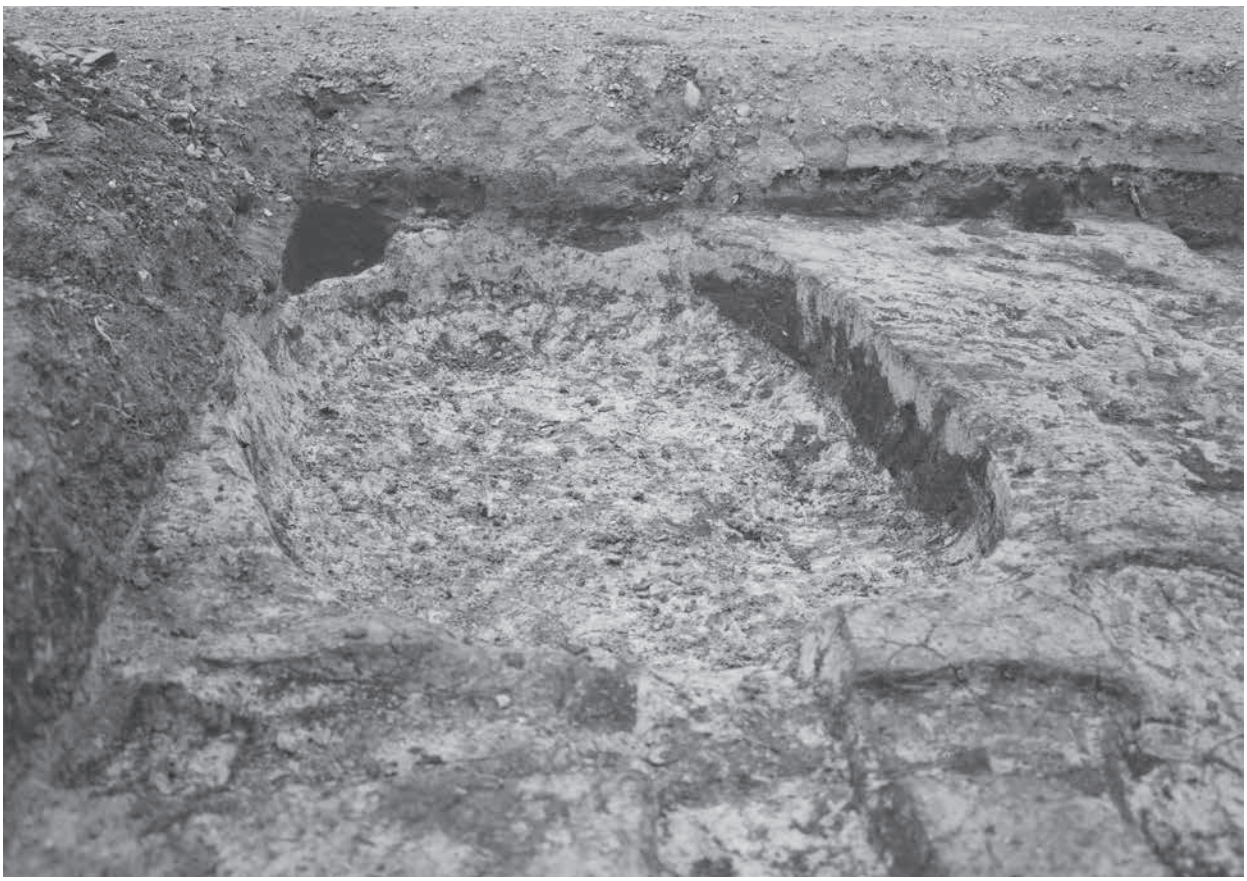
ＳＢ10500・10511・10512・10513・10514・10515（南から）

写真図版Ⅲ－４　第177次調査遺構（４）

ＳＢ10504（北から）

ＳＢ10507（西から）

ＳＢ10510（北から）



ＳＫ10502完掘状況（南から）

写真図版Ⅲ－６　第177次調査遺物

5

16

17

20

22

25

39

40

7

50

10

30

石英塊

報 告 書 抄 録

ふ り が な	しせきさいくうあと　へいせいにじゅうよねんどはっくつちょうさがいほう
書　　名	史跡斎宮跡　平成24年度発掘調査概報
副 書 名	
巻　　次	
シ リ ー ズ 名	
シリーズ番号	
編 著 者 名	泉　雄二　伊藤文彦　新名　強
編 集 機 関	斎宮歴史博物館
所　在　地	〒515-0325　三重県多気郡明和町竹川503　TEL0596-52-7027
発 行 年 月 日	西暦　2014年３月28日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
斎宮跡（さいくうあと）	多気郡（たきぐん）明和町（めいわちょう） 斎宮（さいくう）・竹川（たけがわ）	24442	210	34° 31′ 55″ ～ 34° 32′ 30″	136° 36′ 16″ ～ 136° 37′ 37″	20120525 ～ 20130214	310㎡ （第176次） 543㎡ （第177次）	学術調査

所収遺跡名	種　別	主　な　時　代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特記事項
斎宮跡第176次	官　衙	平　安	掘立柱建物 土坑 溝	土師器 須恵器 灰釉陶器 緑釉陶器 志摩式製塩土器	下園東区画 南東部
斎宮跡第177次	官　衙	平　安	掘立柱建物 土坑	土師器 須恵器 灰釉陶器 土錘 志摩式製塩土器	下園東区画 中央南部

要　　約	平成24年度の計画調査は、平安時代斎宮の方格地割における「下園東区画」内の２箇所で調査を実施した。 第176次調査は区画南東部にあたり、平安時代前期から中期にかけての掘立柱建物・土坑・溝を確認した。掘立柱建物では「下園東区画」内に規則的に配置された建物群のうち１棟を確認したほか、区画内を細分する様な溝も確認した。 第177次調査は区画の中央南部にあたり、平安時代前期から中期の掘立柱建物・土坑を確認した。規則的に配置される建物２棟を確認し、この建物群が区画の西半部にまで広がることが判明した。

史　跡　斎　宮　跡
平成24年度
発 掘 調 査 概 報
2014年３月
編集・発行　斎 宮 歴 史 博 物 館
印　　刷　光出版印刷株式会社